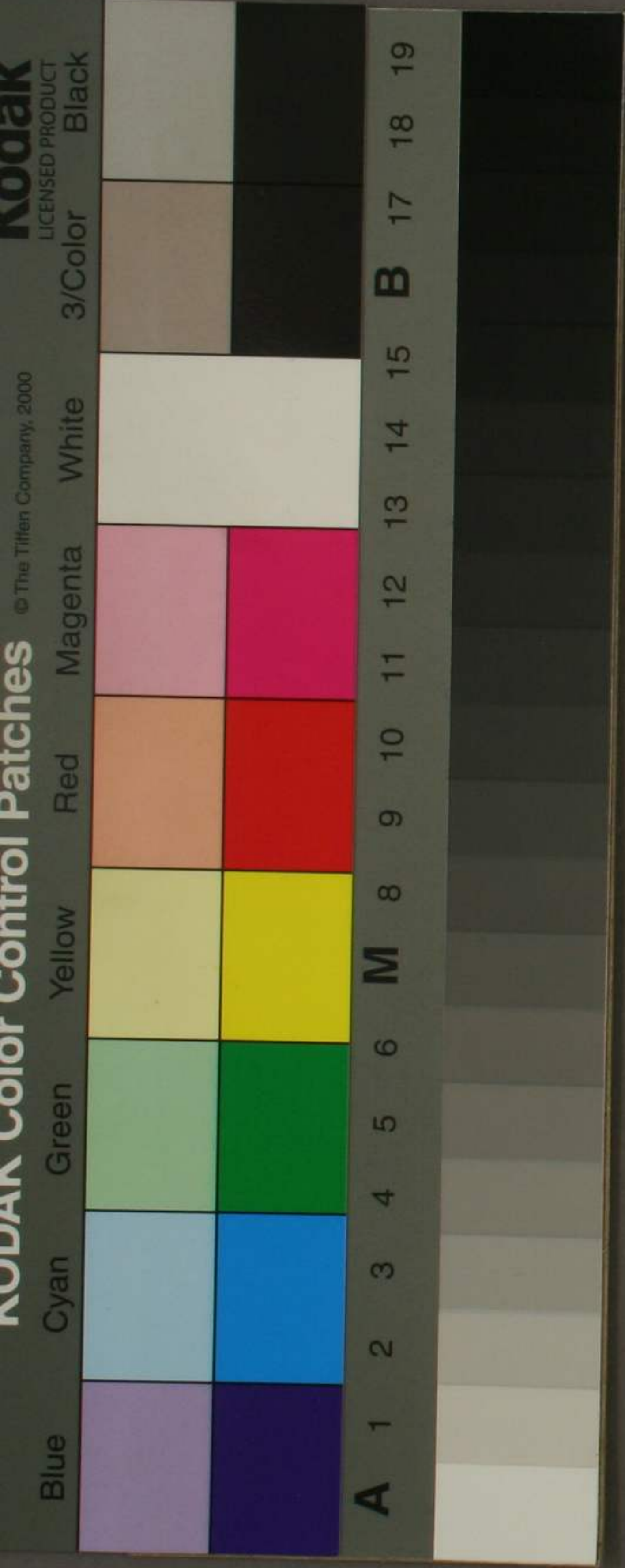


KODAK
LICENSED PRODUCT
© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches



城
常
縣
園
覽
圖
誌

ル 4
3592
2



門 几 4
3592
巻 2



常磐公園攬勝圖誌下巻



水戸松平俊雄編述

此巻ハ偕樂園の一望ハ湖邊の勝地伐とて人車ふ渉れる
 振ひく之伐載モ又偕樂園を聞くれし人車ふ渉れる
 事ともハ無に伐莫り其要伐摘く是伐志るはされと漏
 うるを猶多りたれむそハ續編の成る伐待り記載モ

廢

緑ヶ岡 偕樂園の西武町許伐隔て丸山の南の方より
 見川村小属モ此地ハ元同村緑川某の所有なり
 寛文五年水戸義公購ひ得て別墅となし一亭伐
 設け高枕亭と号けり
 の岨路を窺窺阪といふ明の朱舜水此地ふあひく十境伐



仙湖 南岸より
偕楽園 眺望む

久米 幹文

梅の花ちうぬる

ゆふなふの

河も浪れ

うけうとふ

見

高橋 恭興

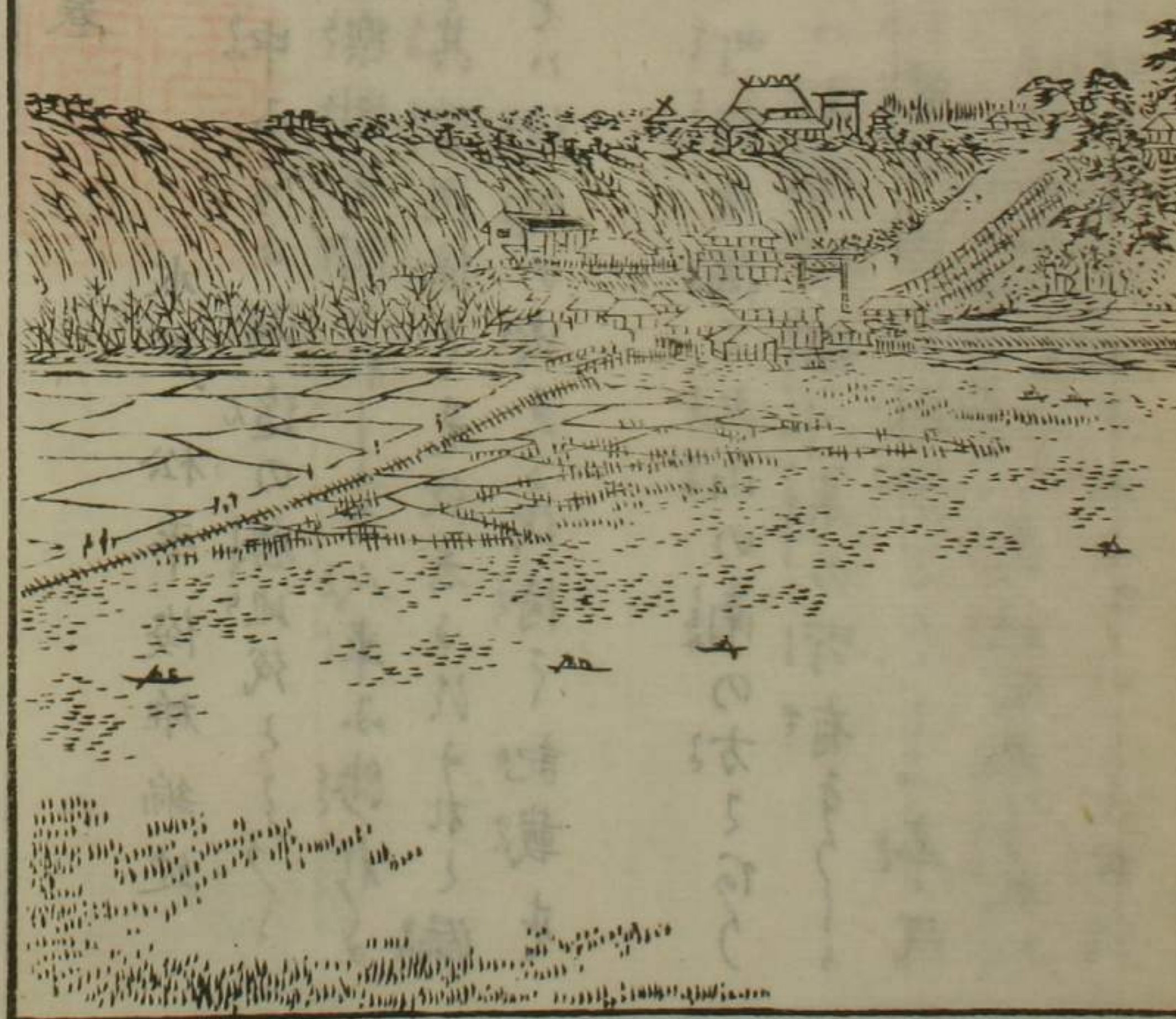
あめ梅のう

くろれ

あふんを

帰る侍すえ

池のうり



おれ 恭吉

あつ浪の

花を匂へ

梅より

とふりも

やうぬ

岸の梅の香

戸牧 久

吹風は枝

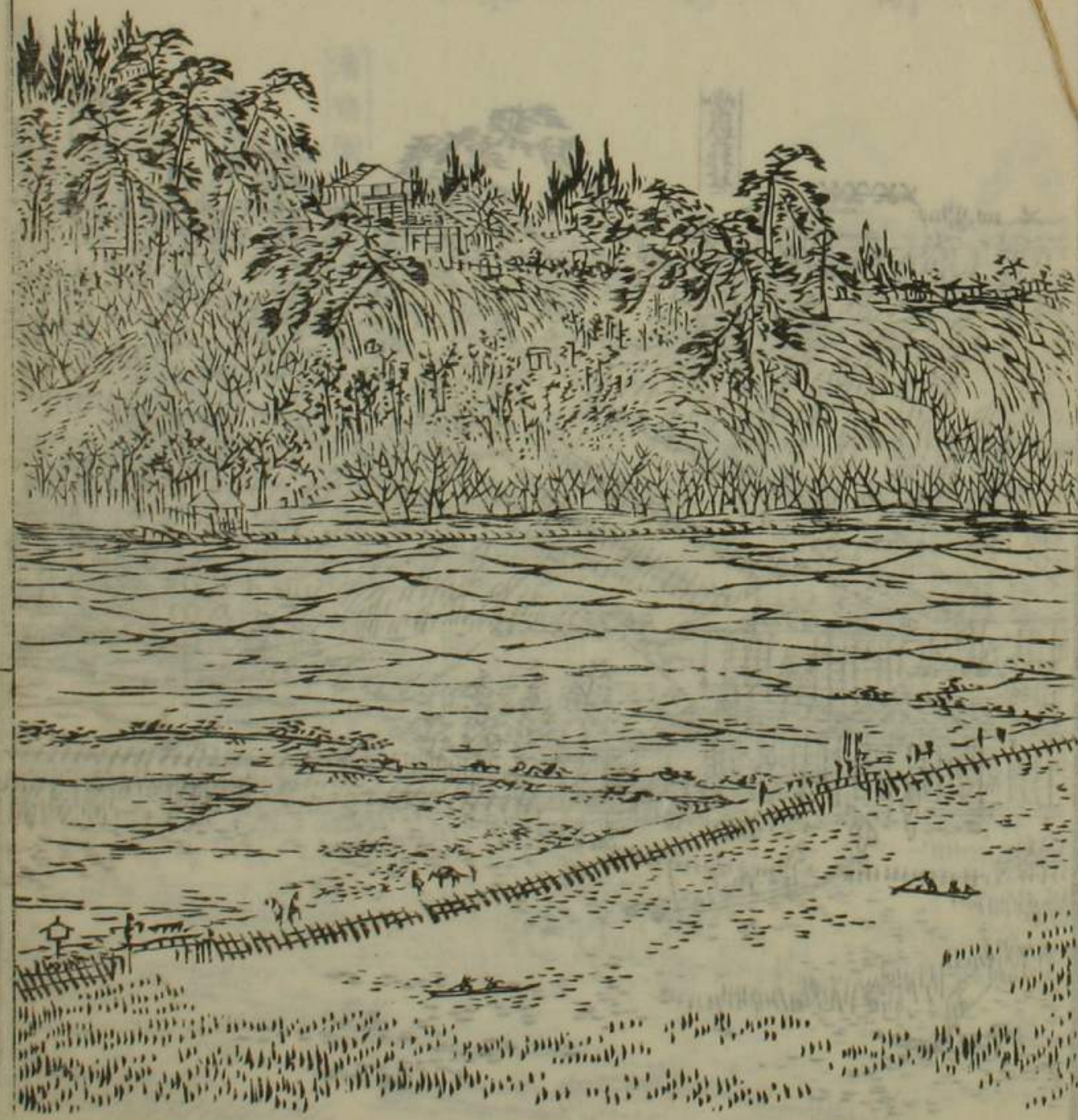
ふれまふも

梅の花

浮ふ浪

きうふれ

くろれ河水



下常磐橋
又高橋とも云

高橋
秋溪久無雨
水淺覺橋高
不怪游魚散
去來車馬囂
小林元茂



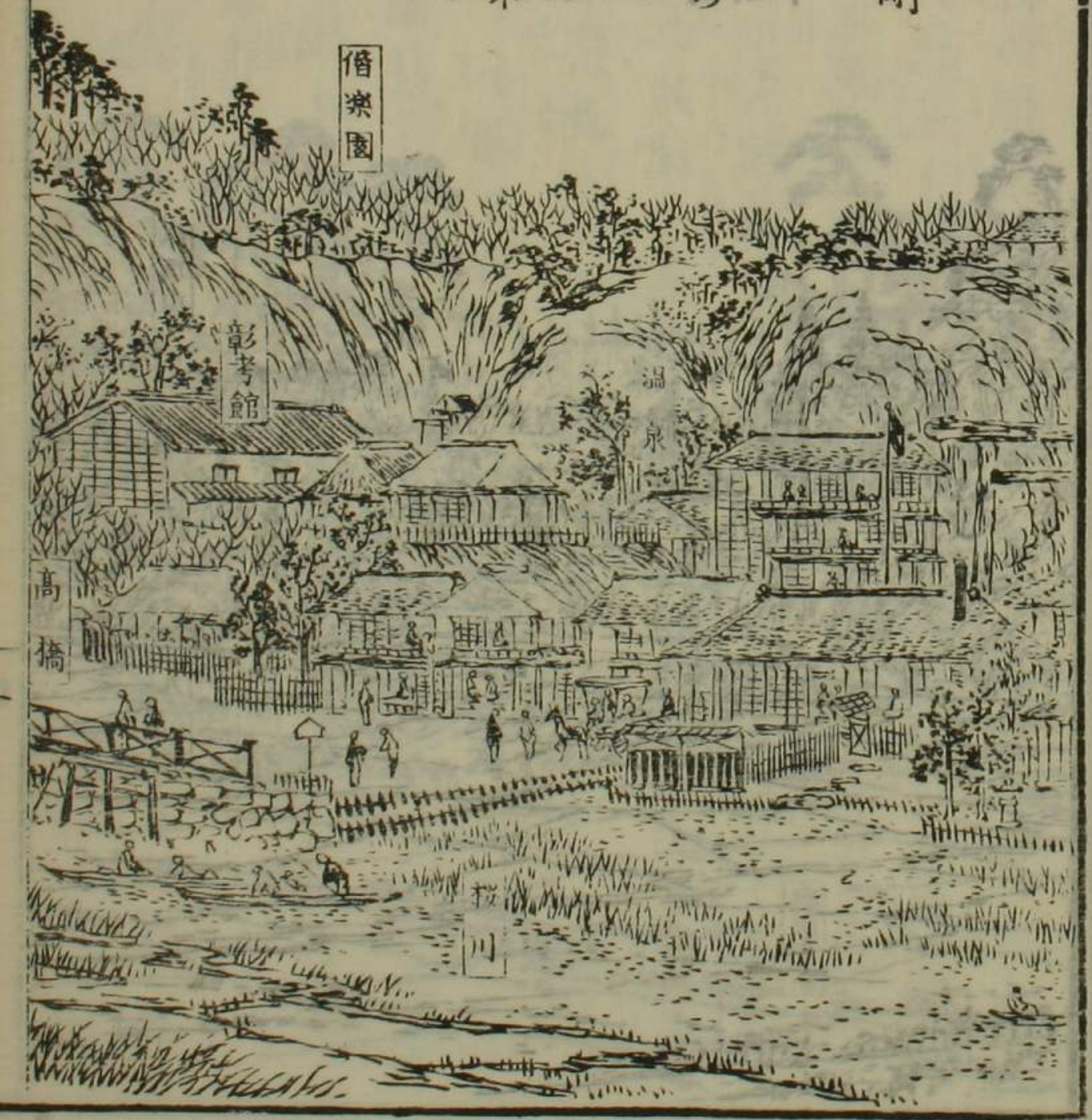
小林至剛

螢飛米葉の
橋のゆふ

風も海まり

月雪此より成
向坂氏和

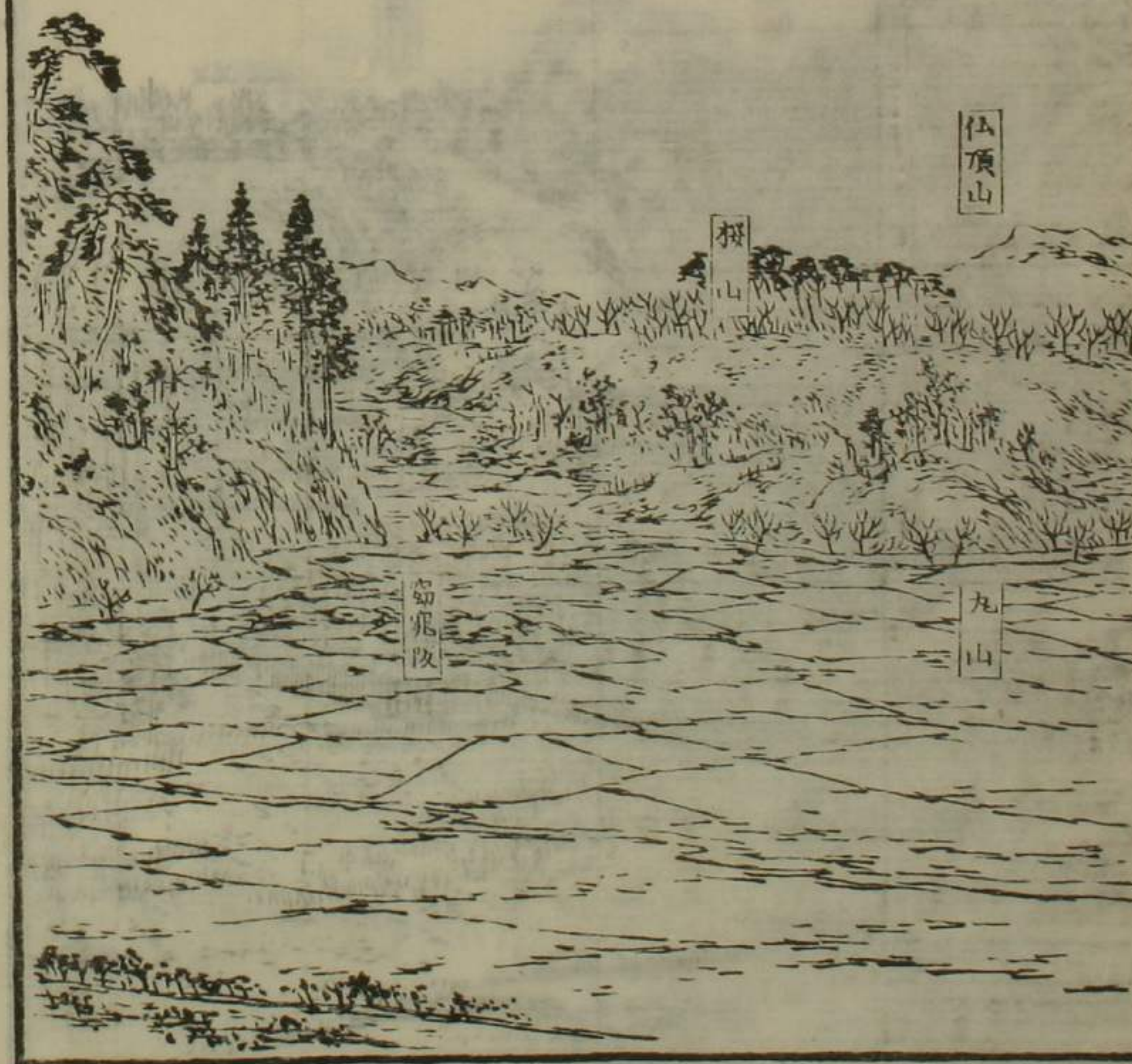
子代
名
何



緑ヶ岡

題緑岡山莊

寂々松間遺世情
翠微風渡四時清
玲瓏多景画屏麗
激澗澄湖磨鏡明
鶴集洲前馴不去
鹿遊林外近無驚
翠岡本與民同樂
方酌金樽歌太平



仙頂山

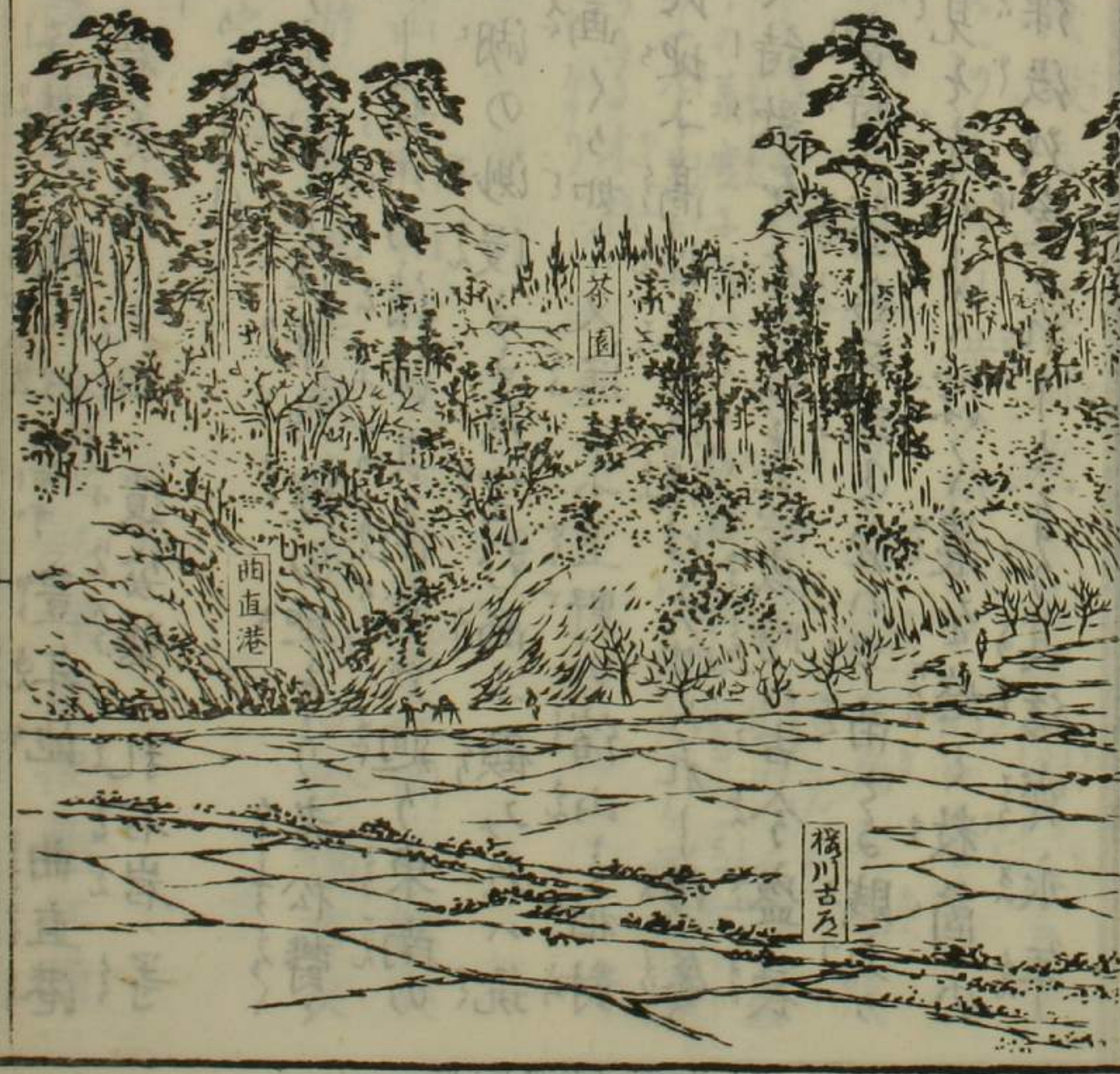
樹山

丸山

蜀龍岡

篠川古瓦

明公菱慙地
不許蕪草侵
茶秀舊樓綠
清風永可欽
手塚陽軒



茶園

曲直港

撰ふいりゆる 君子林 漸入徑又斯可 豐年他 曲直港

高平阜 十年園 君美圃 大田 遺安壘 乳石岩 等

なり今其町在洋うなり

抑此岡ハ偕樂園と相對一佳景幽邃の地なり老松鬱々

とて面茂園繞一極川の清流其南麓茂廻り東南の

間遠く開け子湖の渺漫う茂望む西ふ顧みれハ筑

波葦尾の翠岱画くら如く又遙う上野の諸山と相對

是されハ義公の此地ふ高枕亭茂設けさせられ一頃屢

文学の士茂召して待歌をそそび或時ハ古今盛衰

の蹤茂綸じて之茂當時は鑒み又或る茂ハ早苗とる賤夫

手業の暇を茂茂見をなハ一と深く農を愍と教箇の

公納の中七條の裸茂茂免され一となり其後寶永年

間ふ至り此專茂毀ち其跡茂ふ畠ふ開茂近き己

たりの農人ハ貸り入れられ僅の賦税を納め来りし

天保中偕樂園茂開れり茶園と為し苗茂

山城國宇治よりうけされ培養年をへて精品多く出

せりといふ 高枕亭の兼盛ハ掲けり板額ハ松は鷹の字彫り

原某ハ編ひ茂毀ちる本茂ハ 村上某ハ茂りしなり

緑岡 吉田 吉田 吉田 吉田 吉田 吉田 吉田 吉田 吉田

緑之岡兮于古山莊松柏茂矣玉音鎗矣岡之緑矣

松柏沃矣優之游之樂也足矣歲寒而后松獨秀矣

君子居之何陋之有

題落葉 全

秋老霜楓晚斜陽映錦茵追風飛彩蝶遠徑疊紅鱗

林罇山排闥葉疎月作隣春花驚落木光景轉奔輪

黃齋大君相公落葉高韻題

別業所見

吉弘元常

斯可徑秋色野花織草茵葉零露林鹿雲漲隱溪鱗
泉石自封境煙霞便比隣山中清事會緩步代蹄輪
李秋念日吉子常和予題落葉詩吟之翫之琅
琅璨々於是再步前韻以述綠岡雜興六

梅里

君子林中趣燒紅酌醉茵楓衰漁錦色松老起蒼鱗
憲聚孫康雪溪尋杜甫隣蕭然茅店裏不羨羨哉輪

全

寺井玄同

陪遊仍酌酒寬厚免汗茵霜果摘賴卯芳厨膳素鱗

林深留鹿伏山靜與雲隣君子亭中樂皎兮月作輪

全

森尚謙

春至花成錦秋深葉布茵關々洲上鳥潑々葦間鱗
丘壑占多景松杉遠四隣吟田君子舍好駕小車輪

翠岡即興

吉弘元常

草荏苒樹蕭森酒腸浣清水詩思入碧岑風掃落葉
斯可徑年々德秀君子林

和吉子常綠岡即興韻

梅里

松鬱々竹森々前湛仙波水後聳雙尖岑易容膝安
志也足來巢一枝鷓鴣林

全

板垣矩

銀濤殷碧樹森風來搖千波雲破出孤岑詩人吟懷

緑岡の北に山明堂が建てられ、
百餘年の昔より今も其趾のと存せり



書柿葉四林忽成翰墨林

全

寺井玄洞

湖漱灩山鬱森誅茅卜勝地洗枝納遙岑此日吟懷
一番爽霜風高吹落木林

全

森尚謙

泉石麗松竹森梅秀懷湘水楓紅思楚岑高枕亭中
樂無極四時佳興滿園林

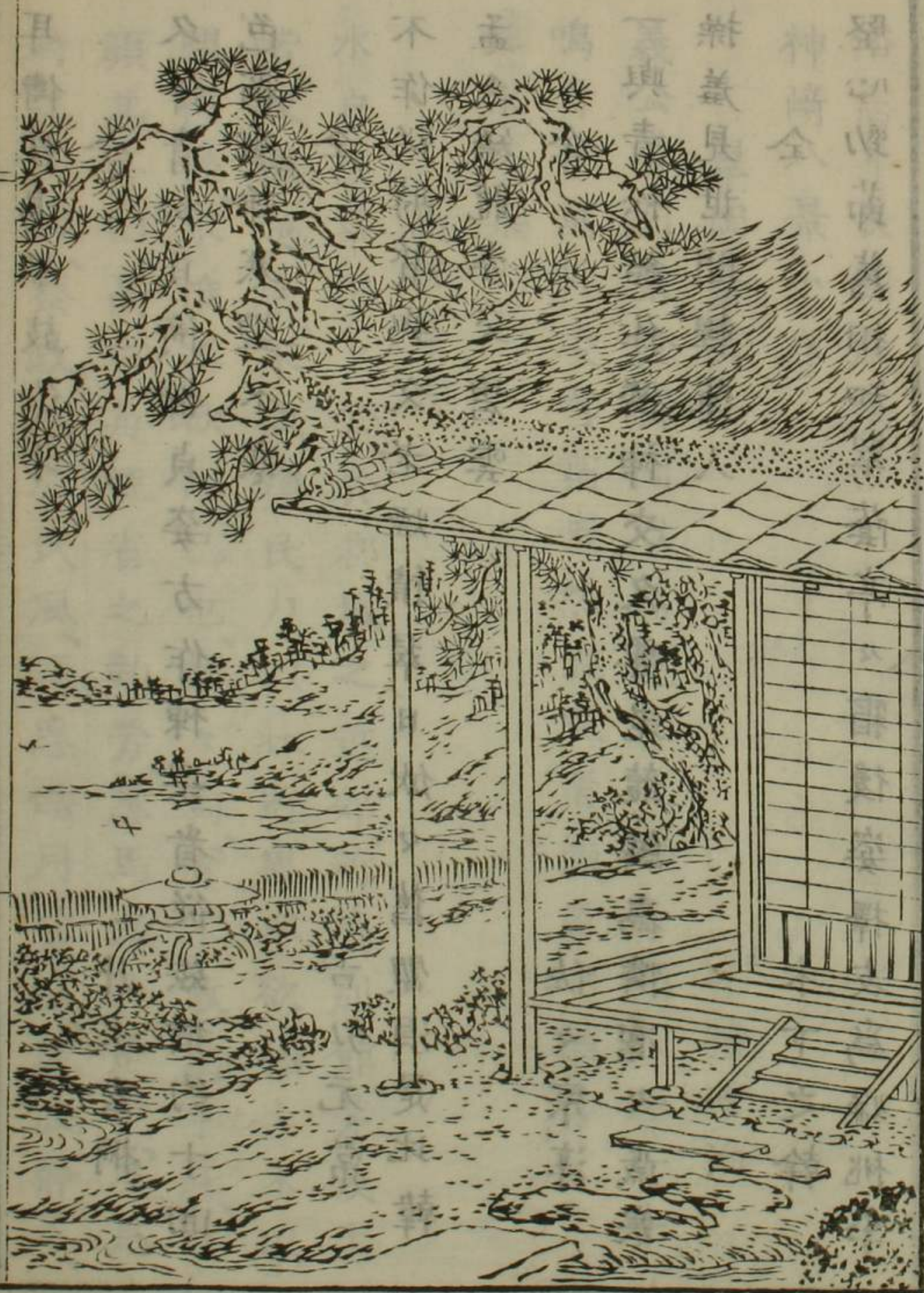
松遐年友

蒼髯鬱々接雲岑晚翠含風颭玉音貞節不凋君子
操千秋長愛歲寒心

全

梅里

遐想植松弘景家知音千歲意增加夜來風度清心



耳傳枕鳴琴鼓伯牙

全

井上玄桐

久伴青松日倚欄貞姿方作棟梁看從茲猶約十回
色霜雪雖寒盟不寒

全

吉弘元常

不作從時質與文老煙積翠日欣欣舊盟須是比韓
孟夫矯龍姿交碧雲

全

佐々宗淳

一與青松結作隣神交久要老龍鱗爲憐凜々歲寒
操羞見世間輕薄人

全

木下之幹

堅心勁節舊相知翠蔭亭々霜後姿擇友爲嫌桃李

俗忘年長對歲寒枝
神崎八景小序

翠岡蒼松

安積澹泊

義公營別業於綠岡以爲遊息之地寺門相距一牛
鳴青松萬株凌雪霜凜然流風遺韻至今猶存
舜水文集

高枕亭志

水戸侯宰相上公於都城之近郊新築別館茅茨土
階疎櫺越席不欲殫民力以壯遊觀不欲極土木以
開侈靡不惟不欲而已也競々爲實不敢出乎此遂
顏其亭曰高枕每觀省之勤勞息馬蹄於是墅及是
時之間暇察政刑於民風恒思皓月當空煙波靜尽

緑々岡
高枕亭の舊趾

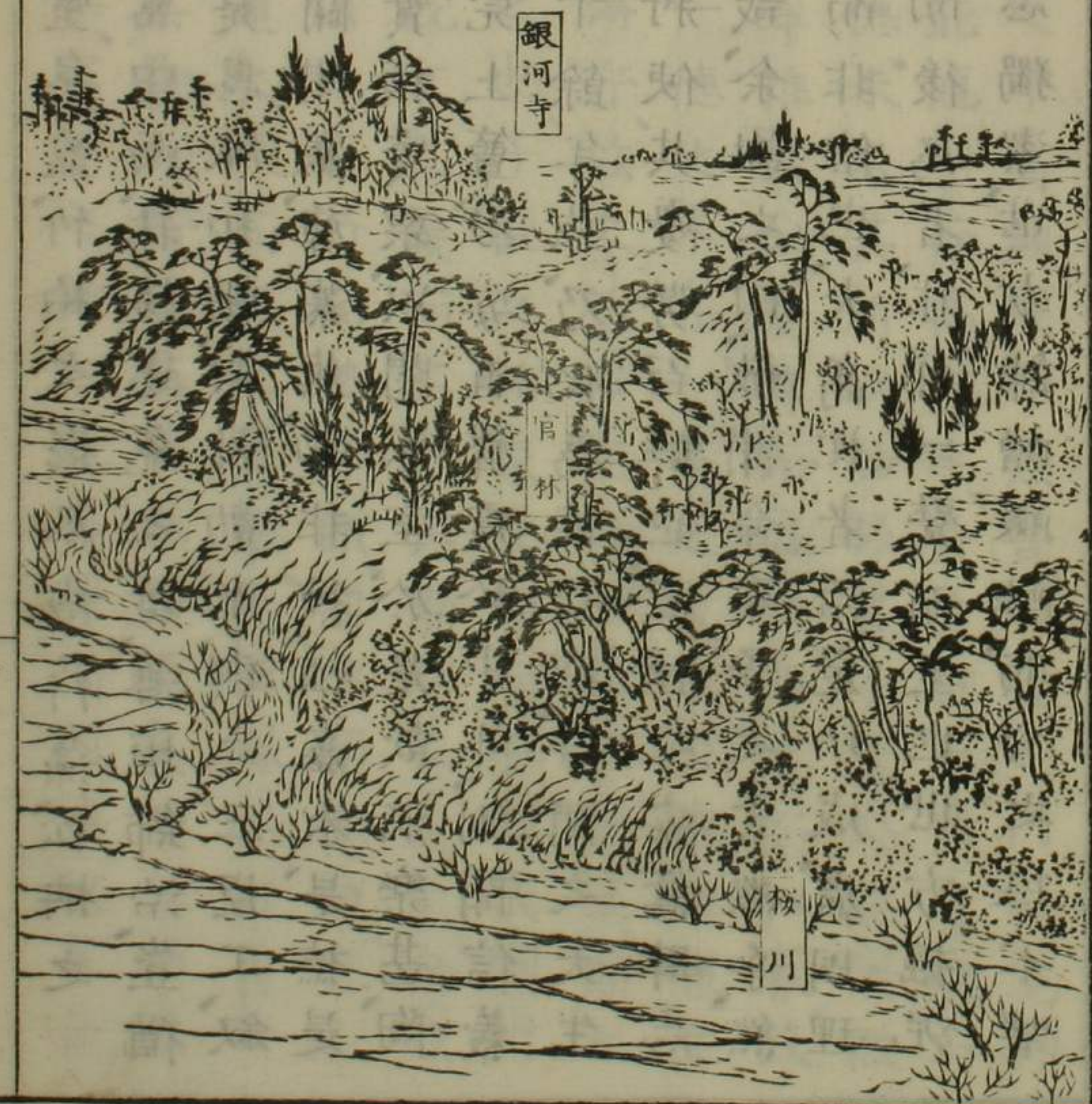
西山公
遐想植松弘景家
知音千歳意增加
夜來風度清心耳
傳枕鳴琴鼓伯牙



省三
松ヶ枝北緑々岡
住すれ

子代をまもる
君うともつ

至剛
みとうろ園茂
花のまのふれ
何と
新風



婦子寧止、百室阜盈、竹柏之影、成荇藻、松栢之雅、堪棟梁、羨富中、爾、非復遂荒之境、藩垣飾治、豈猶草昧之初、於是惠風和暢、對月勸酬、與二三臣工、叙往事、說勤渠、闢閤塞、剪綦燕、鋤非種、植嘉禾、是撫是養、必有豐年、實穎實粟、以閑家室、於是飲酒樂甚、陶然竟醉矣、下莞上簟、乃安、直聲震於中外、側聞信義之著於今、五十餘年、茲乃化爲繞指耶、吾聞之、天生民而立之、君將使其憂勞百姓也、豈使之安意肆志於臣民之上哉、余謝之曰、敬聞命矣、子之言然乎、然未達也、諒矣、而非信也、夫高枕者、治定功成、慮周理得、心曠神怡、而後爲者、非可一蹙而至也、世方掘泥揚波、而公之志獨潔、世方鋪醢醢、而公之性不嗜

酒、設使此邦之中有顛連而無告、四境之內有冤抑而莫伸者、公能偃然而高枕乎、長道有未順、羣醜有未屈、克明其德、未盡其所以詒孫翼子者、公能偃然而高枕乎、無寧惟是公屬尊而近親、曲高而和寡、設使廟堂之上、一德之未孚、一事之失理、公雖欲偃然而高枕、其可得乎、茲之所志也、而非事也、遠期之也、而非遂爲之也、子觀之跡象之粗、而不諒夫制行之高、卑、攷諸說文之義、而不徵其襟期之遠、大、余故曰未達而未信也、客乃面熱汗顏、瞿然而覺曰、吾小人也哉、昧於道之腴、而泥之膚、革是猶鳳凰軒翥於重霄、而吾謂其搶於粉榆籬落也、吾陋矣、而今而後請執鞭以事子、竊子之餘以淑吾身、而因懷以事吾

君也

松遊年友

自息軒

弟代のみよりをうへてさうなる蔭を志す松のしる所

忍穂利重

うへ極し年北山の昭小松君々々々の友とて足る

稻津為海

彼も皆衆を云ふ松や々の松長きそふん

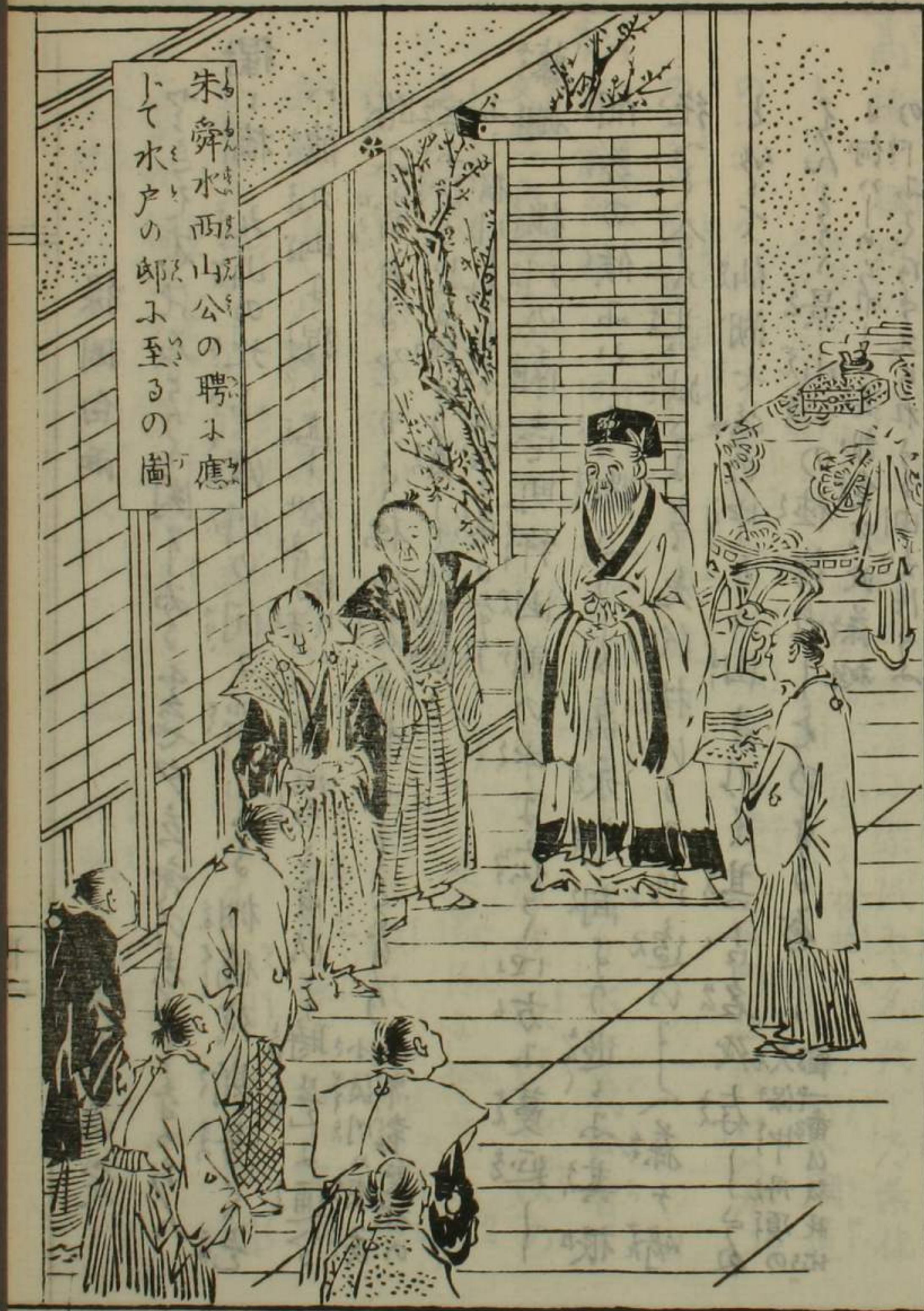
肥田行正

いくわたりそは春をなれん八子代を繋るやのしる所

安孫定輔

えう代の久しき松も今年生れ松のしる所

栗里九景



緑園白雨

安藤為定

やきそふ此みちりう園了るをそ夕立空のあきなりん
 猩々橋 丸山の北小渡川の間に架しうる棚橋伐斯号く是
 ハ彼丸山子猩々亭此亭の事一の伐字もあひ一時是も通令
 路ふ當れるをゆき橋の名は負せしとなり小海川ハ東辰城那部新田村の
 字ハ渡といふ地よりなりて此橋陰
 藤棚 棚川の南吉町坪田圃の中は在るに方ふ蔓延し
 間花の候ふハ一奇觀なりし嘉永年間より過く其根
 絶へ今ハ其趾ぶると久に横ばふふ此遠いし藤々橋
 とゆて仙湖七崎の中より出され其古名伐存しうる
 じんし景山公の極後れしとのなるを
 是飼りられし其餅食伐此藤棚
 の下ふりえられし由云はる

高橋 棚川の下流子波湖の落合ふ架は本名伐下葉橋
 とゆり此橋より武丁許伐うて西の方園にはゆふ板橋存り此所ハ國道
 の一ふし水戸より東京への往還なり東へ壱町往ゆけたり
 の方ふ常盤神社一の華表建り

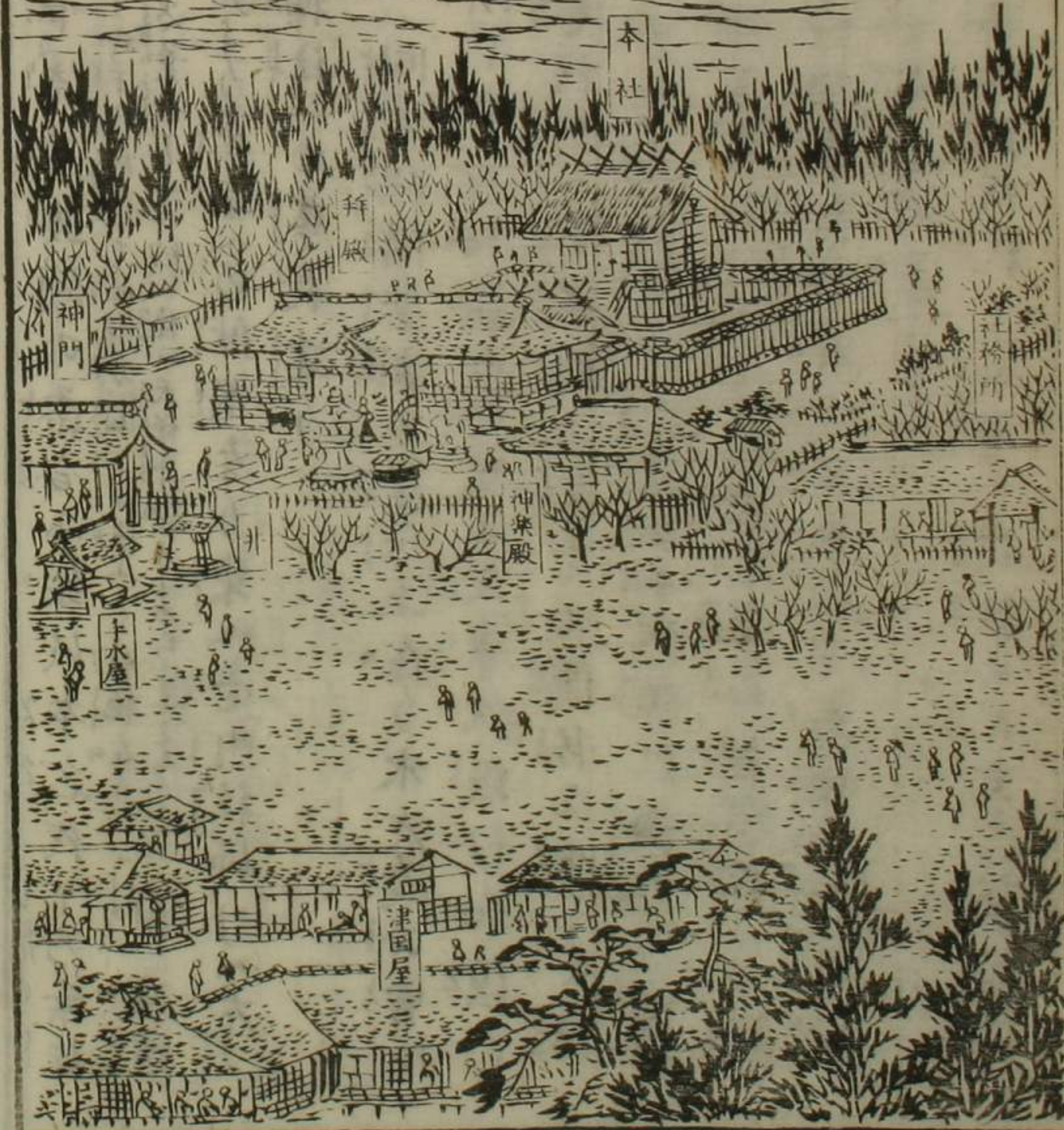
彰考館文庫 同所北借樂園の崖下ふ在り水戸義公曾て
 文學志一巻く東武駒籠の別墅ふ文庫伐設け和漢の
 書籍教萬巻伐貯へ彰考館と号く又儒居は令して給
 多く天下の綺書伐求め多く文學の士伐徴は海内の碩儒
 翕然として此館は集るもの十有餘人各恩禄伐給し編輯
 の事ふ與らむ禮儀類典若干伐撰ひて本朝大典の闕
 する伐補ひ大日本史伐著ハる

皇統及ハ名臣の蹤伐紀し世奉て我朝の正史と稱は寛文

常磐神社
鎮靈社

兩公天下傑
祀典簇冠裳
遺芳流萬古
梅花不敢香
元茂

元山門



雷神

又兼村

階樂園
梅林

鎮靈社

三多居

神馬

手水屋



中明の朱舜水埼陽ふ来る茂聞て禮茂厚ふてこれ茂招死
立て文學の師と為に攝の湊川楠廷尉の碑陰ハ師の撰文
ふして世の知る所なり其後文庫茂水戸の城中ふ移し總
裁一名学官数名を置る館中の事茂司らめ同く國史
の編輯ふ與る明治維新ふ當り藩茂廢し城地皆官ふ
納む故に官ふ清き再ハ文庫を此地ふ移せといふ

章考館の印



印面の篆字ハ水戸藩士
カ石勘分の筆跡より同
藩伴武平の刻なり

常磐神社 借樂園の東隣ふ在り境域東西七拾間南北百五拾
間許其内千坪茂社殿の境内より官有ふ属ハ其餘ハ付属

地より舊藩有志者の寄附なり本社并殿神樂殿神
門神供所神馬手水屋等結構ユミ茂はくせり其他燈
籠高麗狗天水鉢繪馬及ハ境内中の樹本草花の類ハ
衆人の獻備ふ係るえ此地ハ借樂園の一郭内より都
梅林なり茂當社宮建の舉のりより縁め此地茂トし
境内ふ定む枿當社ハ徳川光圀郷水戸家第二代後三位權中
貴公義公と溢る各ハ明治二年
三月特旨茂後一位茂贈らる
二年十二月特旨を
以て後一位茂賜る
の著ハ江湖人より知る所なりされハ當國ハさうふもハ
遠ハ國の人迄も其偉徳茂欽慕し更ハ官の御許茂うけ
各資賤を擲ち新ハ社殿茂創建し常磐神社の號茂
賜り明治六年三月廿七日縣社ハ列せり同七年九月二柱

静

の神跡^{しんせき}は^{しん}湯^ゆの^{しん}義^ぎ公^{こう}高^{こう}徳^{とく}味^み道^{みち}根^ね命^{めい}同十五年十二月別格^{べつかく}官^{くわん}
幣社^{へいしゃ}は^{しん}列^{れつ}同十六年二月告^{こく}祭^{さい}式^{しき}代^{だい}行^{ぎやう}はる^{しん}志^しり^り
より神威^{しんゐ}益^{えき}著^{しやく}く^く衆^{しゆ}庶^{しよ}渴^{かつ}仰^{やう}大^{だい}なる^{しん}種^{しゆ}の^{しん}品^{ひん}と
を^{しん}て^{しん}り^り緒^{しよ}人^{じん}常^{じやう}は^{しん}絡^{らく}繹^{りやく}として鈴^{しん}の^{しん}音^{おん}神^{しん}樂^{らく}の^{しん}音^{おん}に
絶^{ぜつ}る^{しん}隙^きを^{しん}年^{ねん}中^{ちゆう}に^{しん}度^どの^{しん}祭^{さい}事^じふ^{しん}て^{しん}就^{しゆ}中^{ちゆう}五月十二日を^{しん}
て大祭^{だいさい}代^{だい}修^{しゆ}行^{ぎやう}せり^{しん}此^し日^{にち}は^{しん}水^{みづ}戸^こ市^し街^{がひ}及^{およ}び^{しん}近^{きん}御^ごより^{しん}躍^{えつ}
家^け基^き其^{その}外^{ぐわい}棟^{とう}物^{ぶつ}等^{とう}思^{おも}ひ^{しん}く^{しん}小^{せう}松^{まつ}は^{しん}造^{ぞう}り^{しん}く^{しん}神^{しん}前^{ぜん}は^{しん}供^くす^{しん}遠^{えん}
近^{きん}競^{けい}ひ^{しん}集^{しゆ}り^{しん}て^{しん}大^{だい}ひ^{しん}は^{しん}賑^{にぎ}り^{しん}なり^{しん}
鎮^{ちん}靈^{りやう}社^{しゃ}常^{じやう}磐^{ばん}神^{しん}社^{しゃ}神^{しん}門^{もん}より西^{せい}の方^{ほう}に^{しん}在^{ざい}り^{しん}境^{けい}内^{ない}東^{とう}西^{せい}招^{しやう}
五^ご間^{かん}南^{なん}北^{ぺい}招^{しやう}式^{しき}間^{かん}神^{しん}社^{しゃ}壇^{だん}は^{しん}東^{とう}に^{しん}嚮^{きやう}ふ^{しん}當^{たう}社^{しゃ}は^{しん}水^{みづ}戸^この^{しん}士^し民^{みん}
國^{こく}事^じふ^{しん}殉^{しゆん}せ^{しん}者^{しや}を^{しん}初^{しよ}め^{しん}維^い新^{しん}以来^{いらい}官^{くわん}軍^{ぐん}は^{しん}属^{じやく}西南^{せいなん}の^{しん}役^{やく}に^{しん}戦^{せん}没^{めつ}せ^{しん}る^{しん}
の^{しん}灵^{りやう}魂^{こん}代^{だい}徳^{とく}の^{しん}紀^きね^{しん}る^{しん}所^{しよ}より^{しん}國^{こく}中^{ちゆう}大^{だい}ふ^{しん}有^{いう}志^し輩^{はい}代^{だい}募^ぼり^{しん}官^{くわん}又^{また}

之^し代^{だい}補^ほけ^{しん}明^{めい}治^ち十^{じゅう}二^に年^{ねん}五^ご月^{げつ}遂^{すい}ふ^{しん}特^{とく}許^{しよ}代^{だい}得^{とく}る^{しん}此^し地^ちに^{しん}社^{しゃ}殿^{でん}
代^{だい}造^{ぞう}營^{えい}を^{しん}毎^{まい}歲^{さい}五^ご月^{げつ}十^{じゅう}三^{さん}日^{にち}代^{だい}を^{しん}つ^{しん}る^{しん}こ^{しん}れ^{しん}を^{しん}紀^きる^{しん}
大^{だい}鼓^こ常^{じやう}磐^{ばん}神^{しん}社^{しゃ}の^{しん}神^{しん}樂^{らく}殿^{でん}は^{しん}備^びふ^{しん}る^{しん}大^{だい}鼓^こは^{しん}世^{せい}に^{しん}未^み曾^{そう}有^{いう}
の^{しん}を^{しん}の^{しん}ふ^{しん}て^{しん}徑^{けい}り^{しん}四^し尺^{せき}七^{しち}寸^{すん}五^ご分^{ぶん}胴^{どう}の^{しん}圍^いり^{しん}一^{いち}丈^{ぢやう}五^ご尺^{せき}五^ご寸^{すん}同^{どう}く^く
長^{ちやう}サ^さ六^{ろく}尺^{せき}寸^{すん}左^さ右^うふ^{しん}銘^{めい}文^{ぶん}あり^{しん}景^{けい}山^{さん}公^{こう}の^{しん}親^{しん}筆^{ひつ}なり^{しん}面^{めん}
ふ^{しん}九^{きゅう}龍^{りゆう}の^{しん}模^も樣^{やう}代^{だい}畫^えく^{しん}公^{こう}曾^{そう}て^{しん}在^{ざい}國^{こく}の^{しん}頃^{きん}武^ぶ備^び代^{だい}擴^{くわく}充^{ちゆう}
せん^{しん}ふ^{しん}野^や外^{がい}の^{しん}演^{えん}習^{しゆ}あり^{しん}と^{しん}代^{だい}之^し代^{だい}製^{せい}して^{しん}陣^{じん}中^{ちゆう}に^{しん}備^び
へ^{しん}られ^{しん}て^{しん}なり^{しん}を^{しん}神^{しん}樂^{らく}殿^{でん}の^{しん}側^{せき}より^{しん}振^{しん}る^{しん}大^{だい}鼓^こは^{しん}
千^{せん}波^は湖^こ東^{とう}北^{ぺい}に^{しん}水^{みづ}戸^こ上^{じやう}下^げ市^し街^{がひ}に^{しん}接^{せつ}し^{しん}西^{せい}南^{なん}に^{しん}常^{じやう}磐^{ばん}千^{せん}
波^は吉^{きち}田^{でん}三^{さん}ヶ^が村^{むら}の^{しん}地^ちに^{しん}濱^{はま}に^{しん}東^{とう}西^{せい}凡^{はん}そ^{しん}代^{だい}招^{しやう}五^ご町^{ちやう}五^ご十^{じゅう}間^{かん}
南^{なん}北^{ぺい}六^{ろく}町^{ちやう}余^よあり^{しん}然^{しか}して^{しん}此^し湖^こに^{しん}會^{かい}する^{しん}と^{しん}此^し僅^{けん}に^{しん}二^に流^{りゅう}
ふ^{しん}過^かは^{しん}一^{いち}流^{りゅう}に^{しん}申^{しん}妻^{さい}領^{りやう}より^{しん}出^でて^{しん}常^{じやう}磐^{ばん}村^{むら}に^{しん}至^{いた}り^{しん}湖^こに^{しん}注^{しゆ}

千波湖

柳堤春水
臨別誰攀折柳枝
傍曲塘輕煙籠鴨
綠細雨濕鷺黃鶯
柳疎還奈管絃低
又昂翅塵相映處
魚隊幾為群
安積澹泊

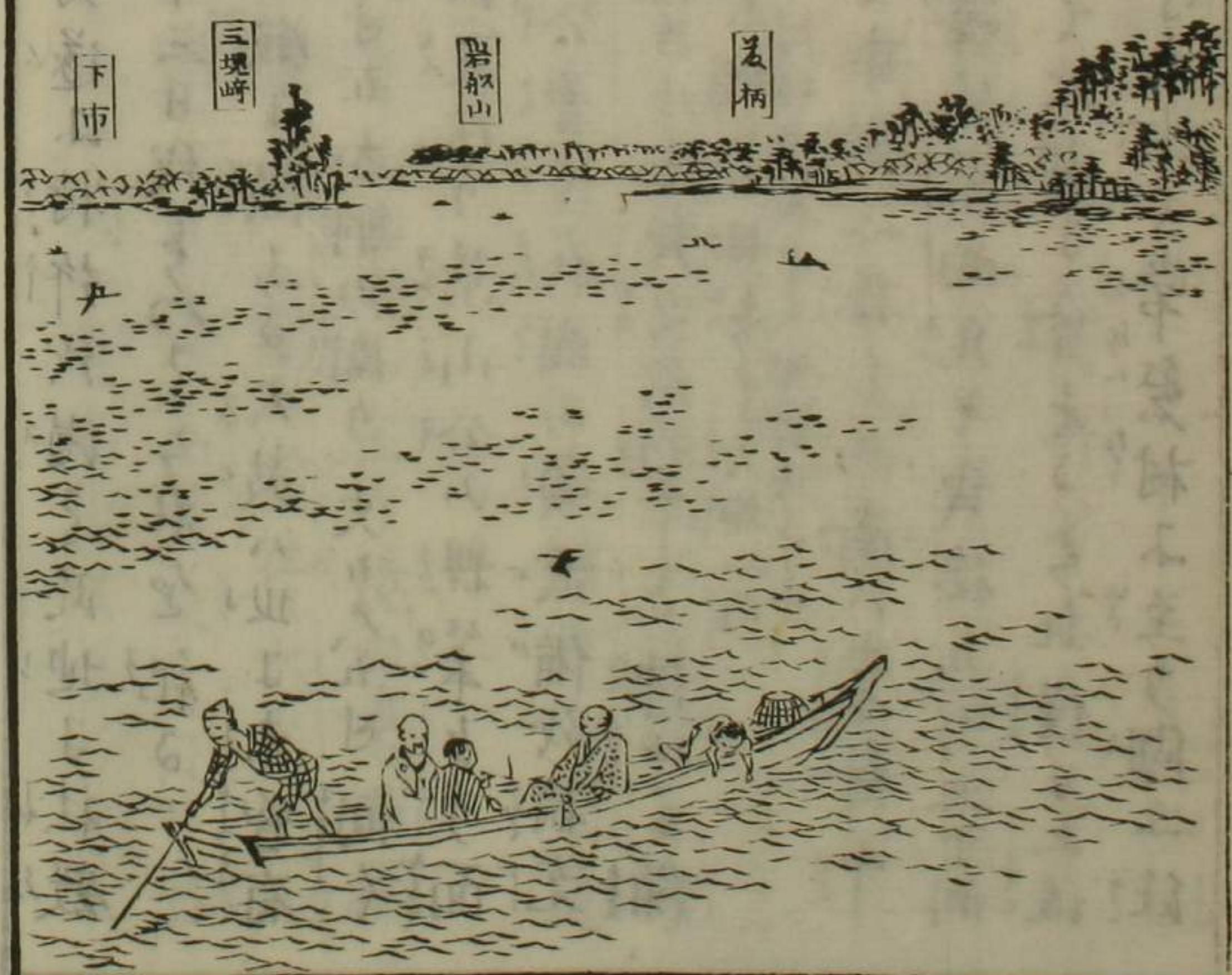
吉田村

三堤

岩船山

三堤

下市

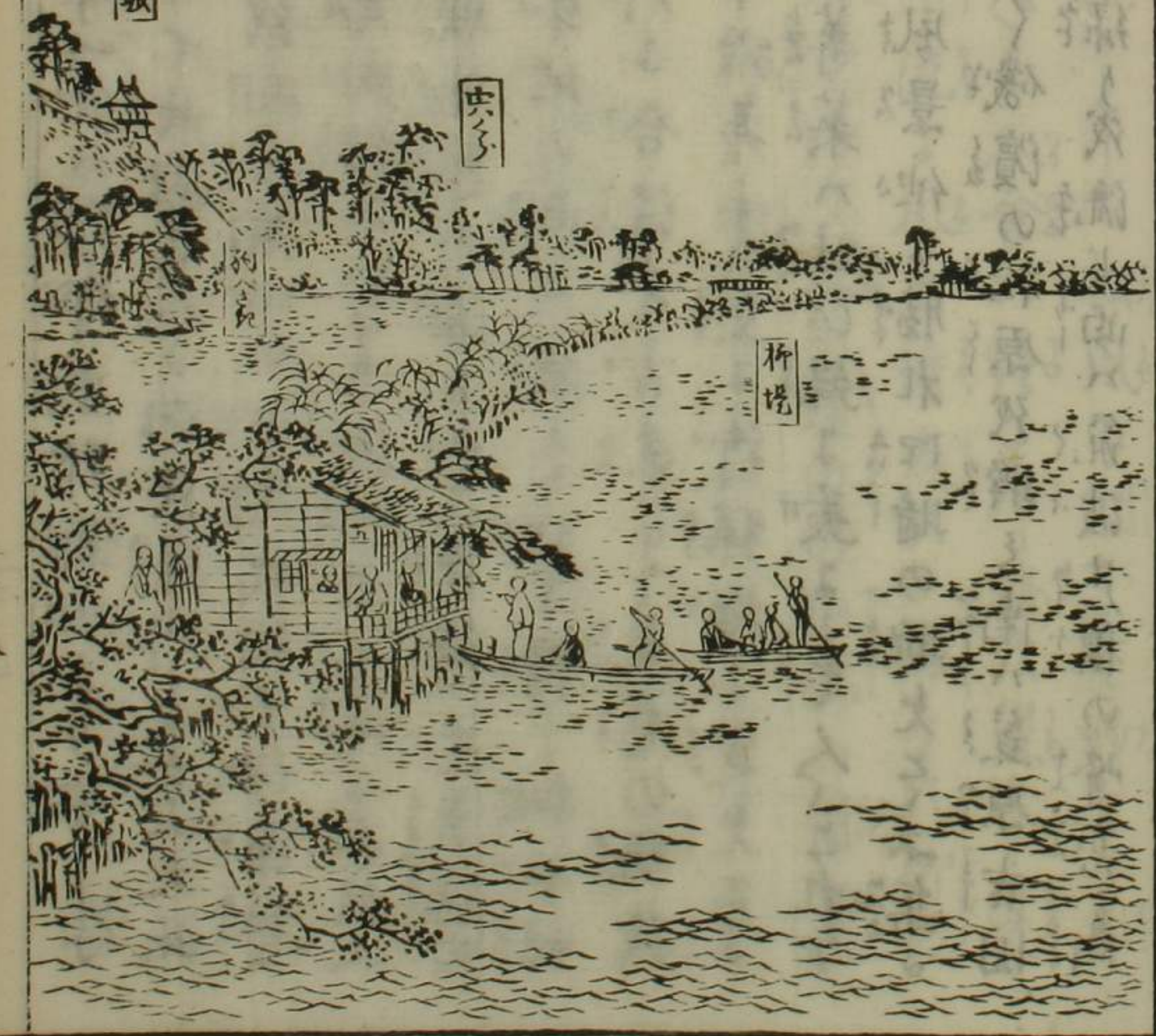


千波
岸さゆ
千波の沼北
風を
至剛

折堤

六ヶ

水戸城



く是則ち横川なり一汎ハ同郡東野新田より衆子
波村筑能崎に至りて此湖は入る之代逆川と云ふ又此
湖水より三魂岬代田の市街代経て伊奈堀
入り東流々同郡島田村より洞沼の下流は合流又
柳堤の水門より舊城外郭の濠に入り東流々東橋の
大堰ふ落ち士族弟地の間代東より北は轉ト細谷村
鳩橋ふ至り那珂川は合流走古来より魚鳥の狐代
禁ぜられし明治十六年より更ニ御狐場は定えらる
又此湖中ふ産する蓴菜は味は殊に美しとて人々これを
賞ぜり凡そ此地の風景他は勝れに時の眺えをふ集る
東ハ水田連りて遠く磯濱の松原代眺と南ハ笠原吉田
の杜は對ひて静波緑り代流し西ハ筑波芦穂の峰赤高

く傳へ北ハ大城巍々として松風の裾へい妙なり春
ハ南地ふ花代尋より入會の鐘は歸路代侵り夏
ハ孤舟ふ掉きて中流は風を待或いは緑なり柳の
陰は三伏の暑代忘より秋ハ遠近の山端の梢へ代
深る楓葉ハ湖上ふ錦代晒はく疑はる就中中秋の
月のゆふ金ハとけらふは白く又白妙の雪は
旦ハ騷人墨客おのく相携へて湖邊の閑亭は會し
待歌管弦の興代添はるを妙なり久実ハ郊外第一の
勝地ふして水戸八景の冠するべし水戸義公曾てこの
湖代圓りて八勝代置るは日ゆ七面山秋月神崎
寺晚鐘梅戸夕照下谷帰帆柳堤夜雨藤柄暗嵐
蒔田落厂緑岡暮雪等なり又天明年間近ハ湖

中野の運河にて倒花の折ハ清香人の袂代藝ハ一時
の奇觀なり其後いはずとなくその根絶へ今に残る
を稀ふなり也

七崎 古来より此湖代えづりて七崎と稱するものあり

妙法崎 神壽寺の境内あり 梅戸崎 上市梅香 駒入崎 上市柵町の筑能

崎 吉田村安蘇 庵崎 子波村通川の柳崎 子波村東京街道 藤崎 西の山崎あり

八澤 常磐村借楽園

今二村合して 狐沢拂沢 二村とも今 福沢 今子波村 米沢 吉田村の隣村あり

中沢 古町付村の字より 今吉田村の地より

神崎八景小序

千波涼月

安積澹泊

積水長天湖光瀲灩東吹海氣西吞山嶽直北金城
巍峨亘南林巒輻湊暑夜皎月漾波爽人肌骨

仙波湖

森 儼塾

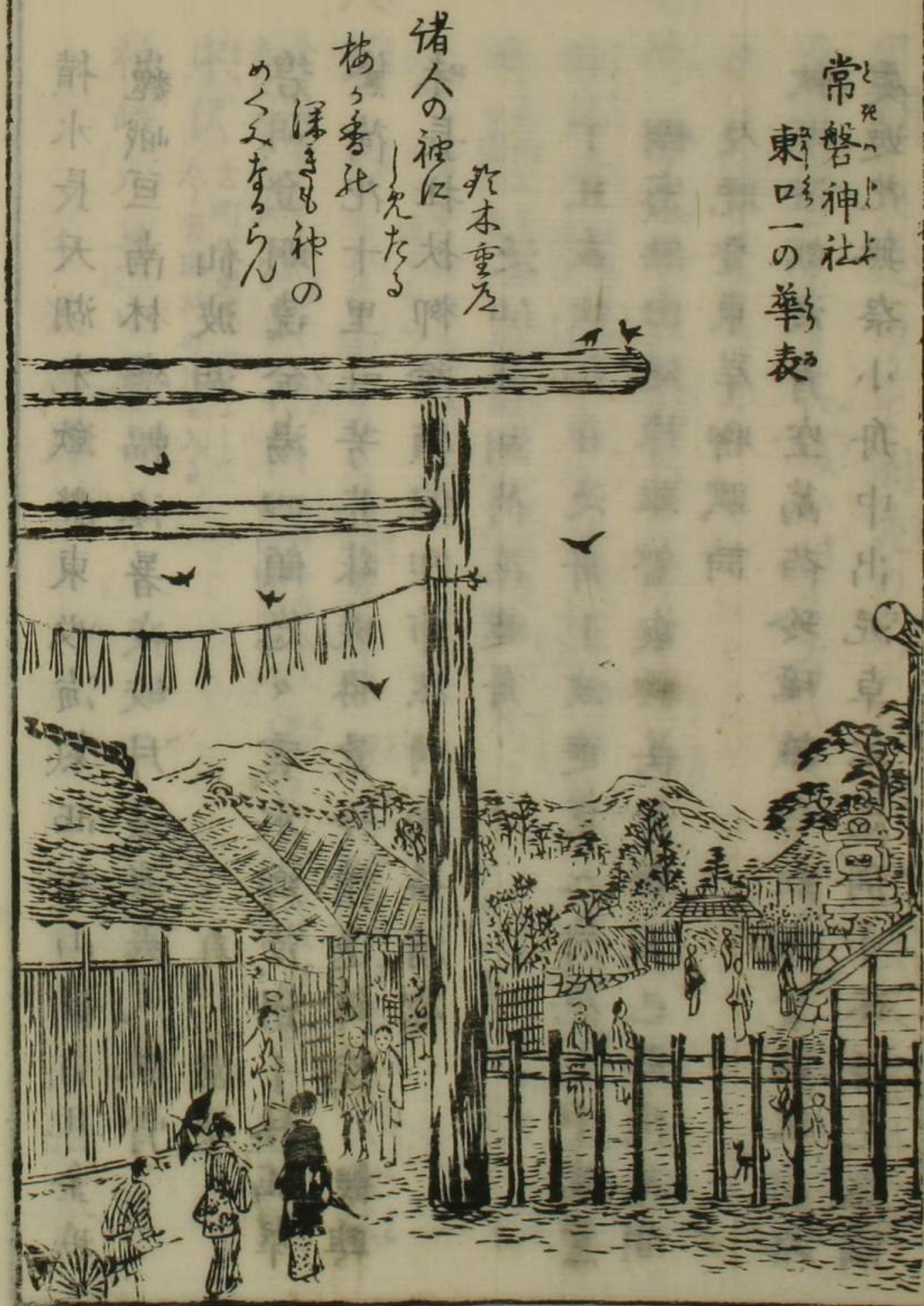
碧湖澄朗遠金湯四顧悠悠雲水鄉茂樹千林涵翠
黛荷花十里吐芳芬蘇堤勝景吟情遠鑑院 觀興
味長拄杖柳陰頻俯仰沛然時雨益清涼

泛仙波湖荷花遮舟

丁丑孟秋九日泛舟千波進東入荷花之中萬薰
稠密無由迴棹雖暫乘興甚苦難盡已而陵花間
及晚登東岸聊賦詩

秋湖澄朗浸青空菡萏玲瓏雜白紅隔葉難求前路
處遮花無奈小舟中出泥卓尔思周子迷澤茫然惱

常磐神社
東口の華表



諸人の神に
於本重及

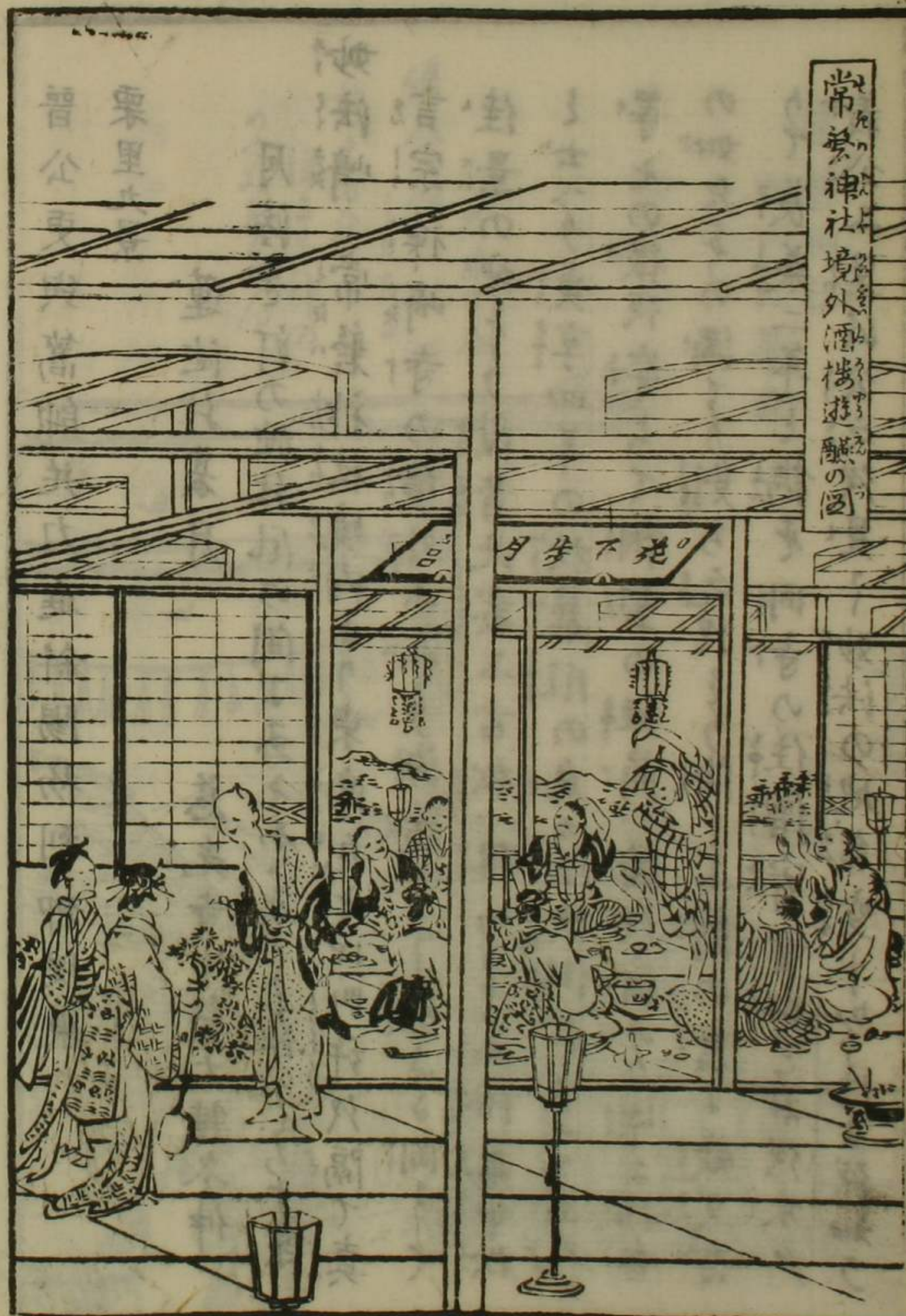
梅香此
深きも神の
めくふなるらん

晉公更與篤師并力進斜陽初到柳堤東
栗里九景

蓮池北菖月

慈光寺中務太輔冬仲

月清き汀の池北風の間に玉をかくるくまのくちす葉
妙法崎 常磐神社境内より東南凡そ七町許に隔て真
言宗神崎寺の境外に在り湖邊より出づる岡より
佳景の地なり往昔此處に古松一株ありて土俗亀甲松
と云へり貞享四年の秋暴風の爲め吹倒れしに土人
等その根伐穿ちて銅製の短筒一箇に伐得し中に抹香
の如きもの満てり則ち之伐より除く小筒の裏に款文有
りて長兼二年と鐫を同寺の住僧宥賀師に伐水戸
義公に呈し公之伐見て妙法の地名空しくなりしを伐知り

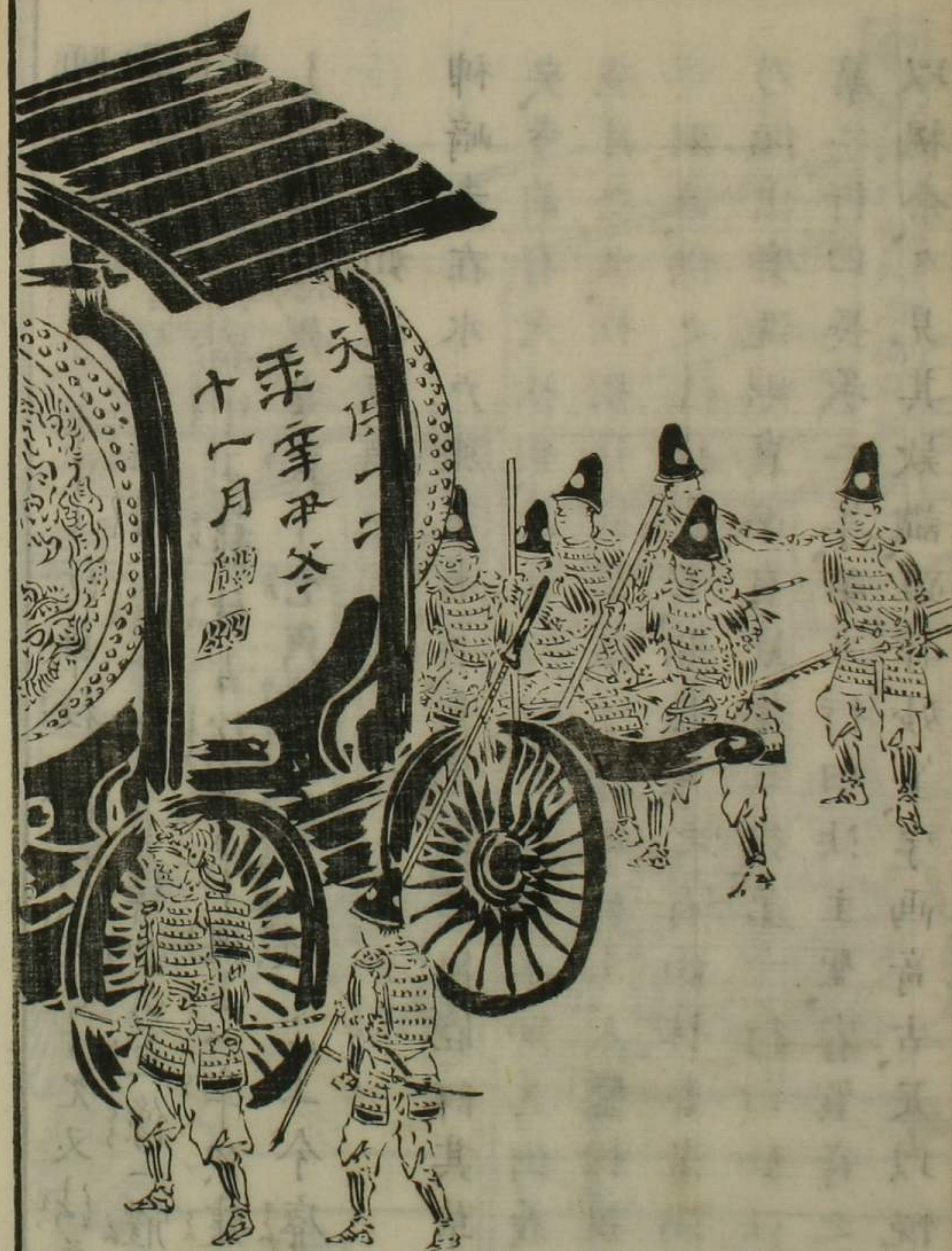


師及び僧侶は令じて法華經一部を寫さるゝ又法華經依の輩は各題目一遍を記さる。擇此の立像一體を彫刻して其胎中には龍彼古松あり。地は一宇を建立して件の像を安置し是れ妙法教主殿と云ふ今廢れ

如法經筒記

神崎寺在水戸城之西南寺志散逸無能詳其草創矣寺前有大松樹名其所曰妙法埒不知其何義也歲月之久松樹枯朽是歲丁卯之秋上人鑿松根得一銅器供之住持宥賀開蓋見之有如抹香者滿中乃傾出磨洗則裏面有款識三行第一行曰如法經第二行曰長承二年第三行曰法主聖宥賀奇之持以視余々見其款識雖非妙筆字画奇古足以悅目

常磐神社の
 神樂殿より大鼓ハ
 天保中景山公の追討狩
 催され一折用ひらるるものなり
 當時車臺に据付る容残模して此より出



焉、夫長承二年、在 崇德帝之御宇、去今五百五十
年矣、神崎之爲寺、不知其草創、而長承年中、有座藏
如法經之人、則當時既有伽藍也明、所謂妙法埒亦
其義顯然、由之觀之、歟識足千歲之寺志也、因作函
藏之、并記由來以垂永世

貞享四年歲次丁卯十月穀旦

常山



右ハ徑筒代納めづ箱の表に記されしものより義
公の撰文なり今神崎寺の什器より其圖前より出
妙法滝 妙法埒の東ハ断岸より此ハ高さ式文幅に
尺むろの瀑布有りて頗る壯觀なり近死年其源
川より涸の堤崩壊せしより水涸れ瀧を亦廢せり
神崎八景小序

妙法瀑布

安積澹泊

嶮巖壁立飛瀑倒瀉發源池水而流入于湖池水不
涸不溢亦可觀造物者之大

神

崎

岩

青川の邊より湖水ふ浴ふ岩穴數箇所より

切

出

花井筒有りハ竈よりその代造りて水戸の市街

又ハ

近郷迄もひさびさ産業と爲され其質柔ふ

して

久し死は堪へば往年此所より石斧三箇代出せり俗

小天

狗の爪又龍の爪なりといり石斧代出せる地諸國は

多し

珍と爲るふ是なり

梅

戸

崎 水戸上市下梅香といり士族弟地の南裏より

て

湖中より出する地なり借樂園より東は望める出崎

より

往昔佐竹氏の族梅香齋と云い人此處に住せり

常磐神社大鼓の銘 五分五厘の一縮字 文字彫下箇置

起震 雲飛 鼓動 風埴

進三 恩軍 盡踊 忠躍

右前面洞の左の方より 洞總體本地臍塗

会く胴の右の方より

天 年

保 年

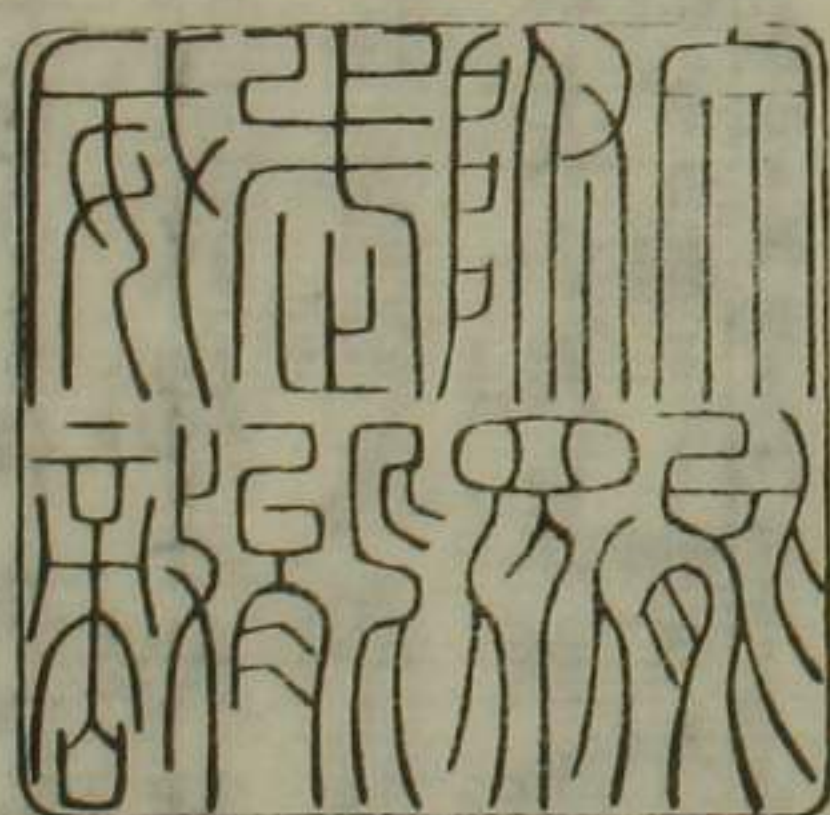
十 丑

三 谷

十

一

月



分 寸 徑 印 以
三 八 面 名

とそ故ふ此稱なり其後天和年間州波の人安藤爲實
爲章とて同胞國學を聞へり一水戸義公召出
て食禄代賜り爲實ふ此地代賜ふ郎中多く栗樹
伐裁く其居皆栗伐代用ゆ義公其亭伐令けり栗
里と云ふ又其亭中より望む處の九景伐撰ふそ八次の
文中に見へり
梅香斎光重の八田知家の裔より那珂郡八田に在り大樹伐
斂し江戶重通の庭に遷り此地に樹せし事なりと教ふ

千年山集

栗里九景の賦并序

藤原爲章

を修こ一の賦は古俳律文のに体なりその説は文辭
明辨ふはまひりなり日本紀萬葉集よりく免代
代の集に見へり長歌伐彼に辭はけり編では古
賦の正辭といふ處をてふ正辭といふ時なりて変

せむんを何る處より今や爲章彼文辭はなり
て長歌の変風を製を何く自我作古と思ふ
はる何れに誠は一時の寓興ふりて發壇の戲事の
といふゆゑ九景は梅戸春風蓮池夏月笠原秋花
林鐸冬山嶺柳雪舟蘆洲双雀吉田耕樂緑岡
白雨

栗里ありわろふのこ此後園ありこの園は栗樹あり
其亭もまゝ栗伐代りて造れるふりて我君は伐名
付させを伐へりを伐けりて後より見渡
さる所は此此園の時の時と云ふ九の題伐をひ
とぬいせりハ茅軒端をえくく園は草すも
月んえくみりくおやひく吟詠は伐をい何れなり

妙法崎

夏時て経儀

多しやうる

妙法崎の

表れけり

戸牧久

神崎寺

青川

九山

妙法滝

東京道



妙法瀑布

瀑泉穿石落

池水入湖流

槁影随波動

經聲入竹幽

白雲簷際宿

青靄座間浮

欲問瑜珈教

驚啼楊柳洲

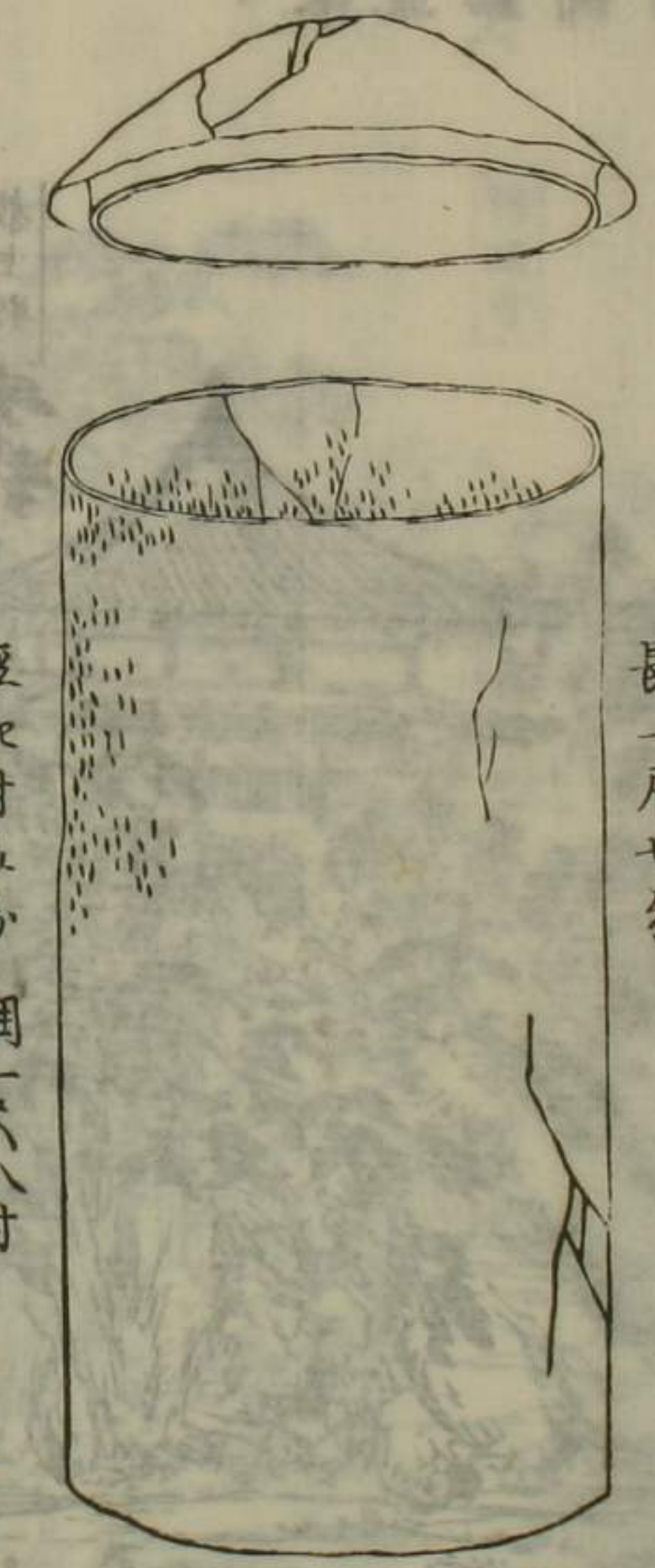
安積滄泊

教主殿



如法徑筒

總俸銅製なり裡ふ如法徑筒の文あり文字よりあ
 出する如く見ゆる表より打込みたるが現われを
 のとおぼし但し表面ハ古く土中より取り出され腐
 朽し文字の形見え難し



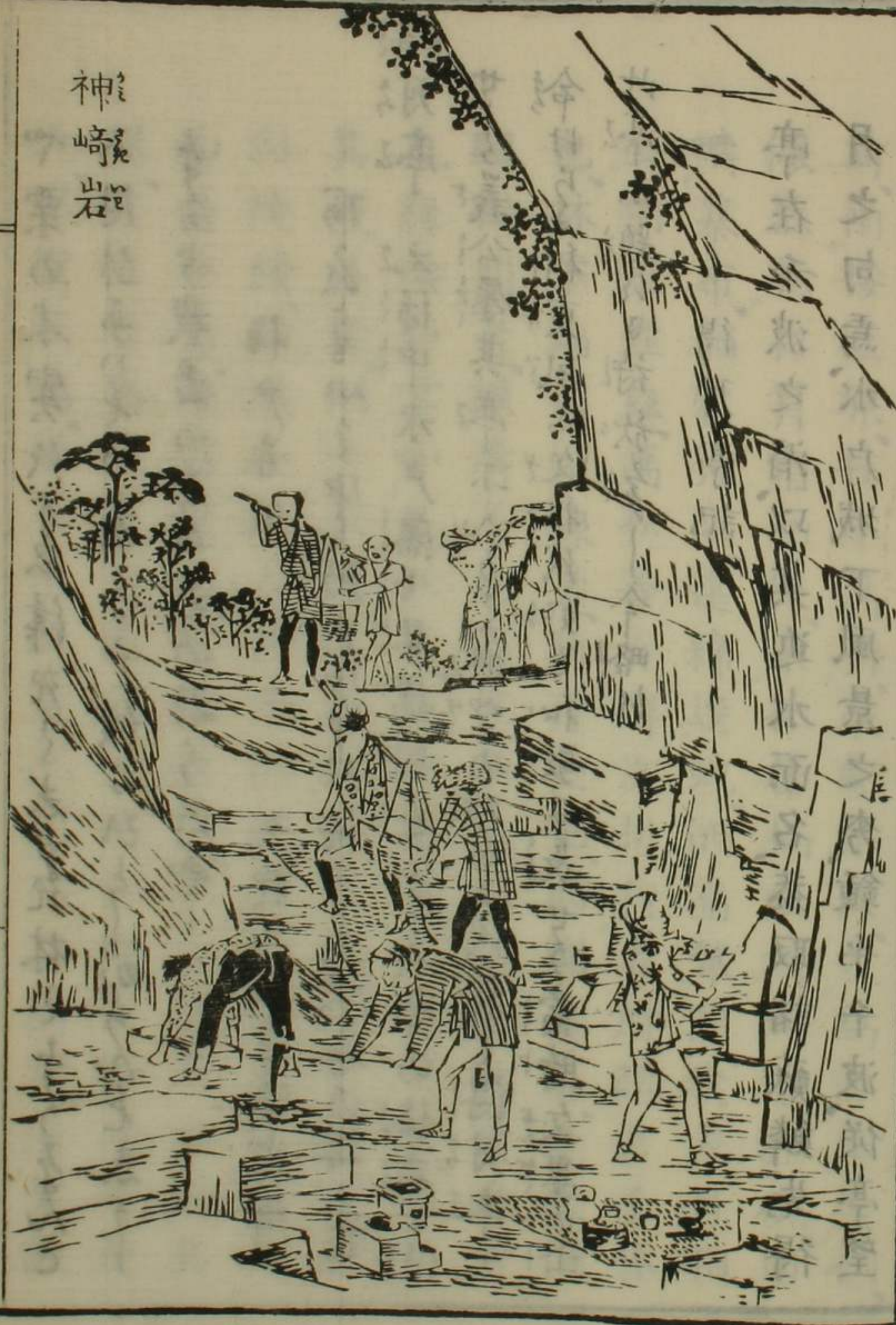
長一尺七分

徑二寸五分 周一尺八寸

山杜鰐月雲北ゆへのかの河はききもむく、難は
 うきよめく芳野龍田をく可なりけりあけり
 梅の戸のゆりゆりしれ名ふあひくくち枝伐りし
 春風の袂はゆるものけきやい津しり夏は吹く
 運ひける池のあけきききききききききききき
 かきききききききききききききききききき
 はきききききききききききききききききき
 秋をききききききききききききききききき
 葉の林の輝もけりけりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 は降る雪伐現る志ききききききききききき
 けりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

これや山の北山麓の清き夜に友伴行し人を
 一と数りし我れ宿をくはくまき小窓のまゝ流れ
 浮洲はなれ霧此芦間は何るひとくひ羽根残
 なしと幾とせりすめりうきし唐くや昔何てふ
 心とせの身残生なり此鳥はむしれ残人顔ひ
 りや水の南の空よりふくきうて路く吉田の
 杜より海川とせふ家くふふ急をなり神をん
 をりやとく君々城居残るらし西は小高れよ
 竹の緑の岡よりせ立くひと村雨のまじり我は子町の
 田面をくく稲葉の露のまきみはる時は相何ふ園の
 民井残りく此と耕く電張ふ何きなゆふな我も
 けとむる眼何きこの園はくくめふふまきひ

神崎岩



や栗の本実伐る急津死る志々死林とさうなんと
ろ月ひみふその富子戸候はひとりからんと志う
をのり我君のたぬその形うけや

梅戸春風

久我大納言通誠卿

阿久もいり中々新戸の神より吹くその梅の香
得月亭 元禄中水戸藩士忍穂利重なる人今の梅巷は位

せう義公屢其亭ふ入りて眺望の妙ある代愛し得月亭と
命けり利重夙小文雅代好く和歌は長せう當時文墨の士
此亭小題は詩歌多し今略し

得月亭記

亭在千波之淵、以其近水而名、蓋取諸蘇鱗先得
月之句焉、水戸城下風景之秀、鍾乎千波、從亭望

焉、南接笠原、林木翳鬱、巖壑雄深、左爲吉田崇祠、
儼然松杉冒霜而聳、東抵藤柄阪戸、周道如砥、田
疇基布、緇廬黃阪、連綿逶蛇、西面翠岡、我人君相
公別墅在茲、萬松蒼々、群立排行者、所謂君子林
也、林下幽邃如線者、斯可徑也、四圍蕭森、茅茨隱
顯、樹間者、銀濤亭也、高枕亭也、西南遐眺、雙巘素
毳、綠陰如雲如玉柱者、筑波峰也、此其大畧、而言
其最美者、則千波也、其沼方七八里、荷葉嬋娟、紅
白陸續、如織如組、方其隆也、瞻之如無水波、就之
如過簷蔔、淨露走珠、涼風獻香、葦汀蓼灣、出沒其
間、其出者爲崎、有七、所謂神崎、柳崎、小松崎等是
也、風駕雨鴨、來集來游、菱花開而錦鱗躍、蒲葉翻

而青蜨飛、野航橫斜、簑笠浮水、々天色空、萬頃寸
眸、最宜月夜、大君愛之曰、千波一鏡、絶奇矣、今在
吾人、視而怡焉、聽而樂焉、惟忍穗子不止如此、忍
穗子名某亭之主人也、參政之暇、退憇于亭、時明
月懸天、皎々瑩々、心清慮澄、於是仰思晦明之義、
克察出入之度、乃知升降之變、預測盈虧之時、遠
詳古今之軌、深究陰陽之故、觀之于天、質之于物、
皆求於我方寸之中、以省于我本然之靈、則其鑑
誠明而亭之所得、酷多、豈帝月哉、況月四時所常
得、非若花雪必有節候也、偷閑樂時、來而飲此、飲
而盡惟、其遊不亦適乎、若不然、與徒爲般衍怠敖
之具、妄供歡笑者何殊、予曾遊此亭、粗陳前義、今

歲使予爲記、冀主人得于斯言、

題忍穗氏得月亭

西山公

月依亭以好亭得月而名、雨霽吳牛喘、星稀魏鵲驚、
清光竹瑣碎、疎影梅縱橫、踏雪々無跡、聽氷々有聲、
林明看白羽、弓掛射青睛、長伴三人友、樂且結酒盟、

得月亭

肥田行正

そみちのまゝに、此のひを水の鏡に、
再遊得月亭用肥田子和歌末字卒賦所見

吉弘元常

多情勸醉思、欄干山色水容盟、不寒濯錦千波斜、日

影楓林、并作蜀江看、

柳堰

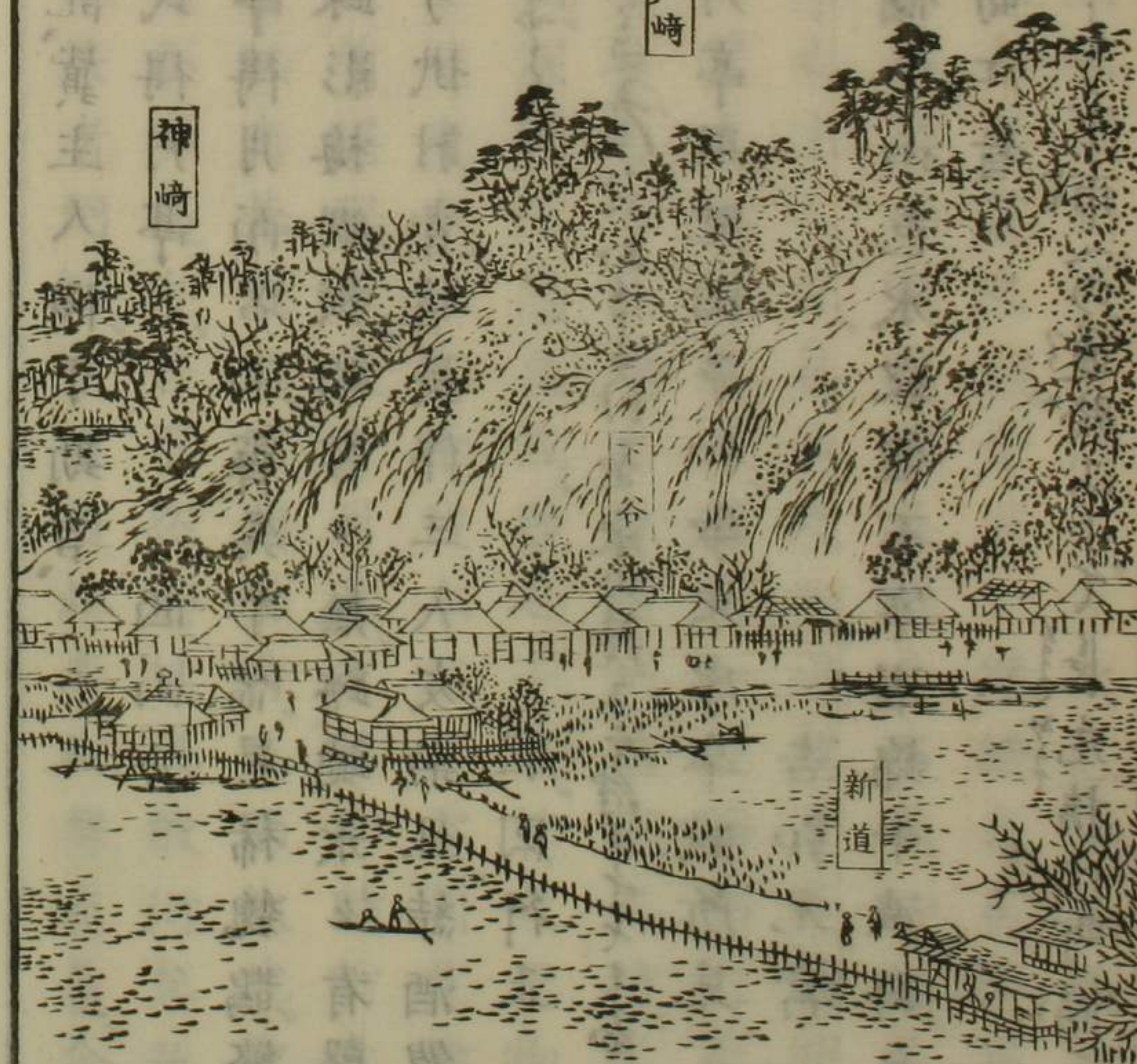
水戸上市より下市への通路ふりて、長尾橋に所幅三

梅戸崎

梅戸崎

神崎

新道



少年山集
栗里九景

久我通誠卿

梅戸春風

何くもをい

ゆるくうの

袖より吹

そよ梅の香

妙法滴

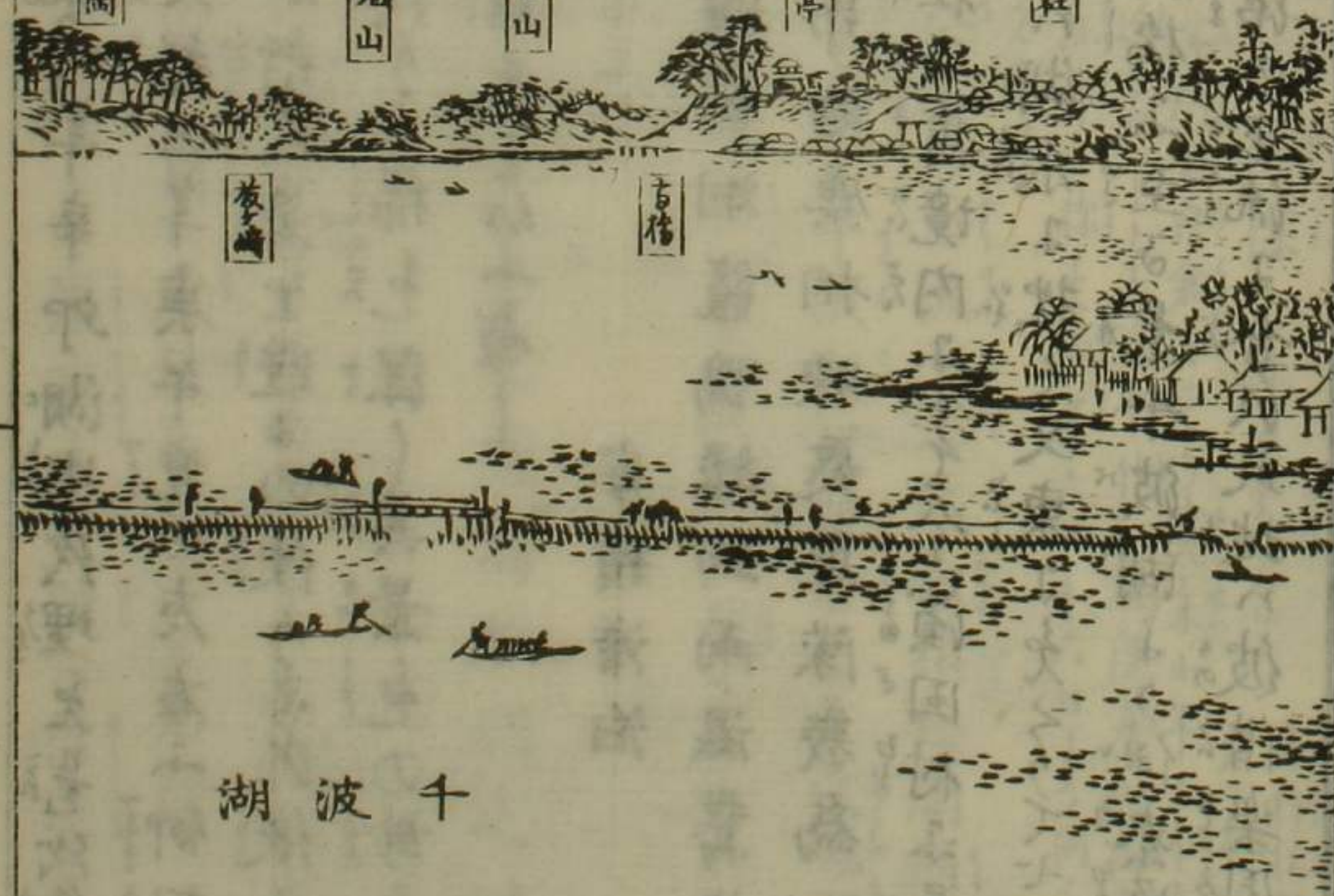
龍泉社

好文亭

龍山

九山

操ヶ岡



千波湖

常磐山外仙湖北
地喚梅香不見梅
只有佳名千歲在
詩人尚着筆花來
向阪氏和

間半板橋三箇所は架け慶安四年辛卯湖中代埋え是れ築
く故に新道と呼へり其後元禄三年庚午堤の左右に柳楓
の類に数百株栽植せられ行人暑を避るの便りといひ依
る彼西湖蘇堤の趣にみえを繕はといふなり

柳堤春水

安積澹泊

臨別誰攀折柳枝傍曲塘輕烟籠鴨綠細雨濕鶯黃
鶯擲踈還密鷺栖低又昂麴塵相映處魚隊幾為行
三塊ヶ崎 下市七軒町龍神社の舊境内より今濱田村に屬
走さやなる杜より西南に湖水は枕と又東よりて七軒
町と紺屋町の際に架せる魂消橋に至る是れ千波湖より伊奈堀へ
通ひる水脈より流末に涸沼の下流に合はれ此地に彼偕樂園よ

り平臨する湖水の東岸に在る同標とするなり
寛永十一年水戸城の外郭に在り今其所を兵舎といひ寛永三年下市赤沼
町より元禄三年又今の七軒町に遷されたり余往々此處に遊歩中御名が
奥津堀の三疊よりて世に名を流し云々余往々此處に遊歩中御名が
九日より生社よりて市中の緑に大なるあり
魂消橋紺屋町と七軒町の間に伊奈堀の上流に架け長指式間幅三
間慶長七年伊奈備前守奉行より千波湖代疏通して茨城郡
大野御式指符録の用水といひ同年初に此橋を築かせられ魂
消橋と令く按ひる小川元遺事よ

長安東霸陵有橋來迎去送至此橋為離別之地
故人呼之銷魂橋也云

此地も水戸の市勢よりて上途の客代送るもの多く此橋よりて
袂を別つるれは前文の古事小擬へ斯に名付けられしなり
藤柄 今藤柄町といふ陸前濱街道より東京より三陸への往還なり

題千波湖
水遠金城鏡
面濃不知何
處寄塵容雨
奇晴好坡翁
在日暮風回
船上松

一松

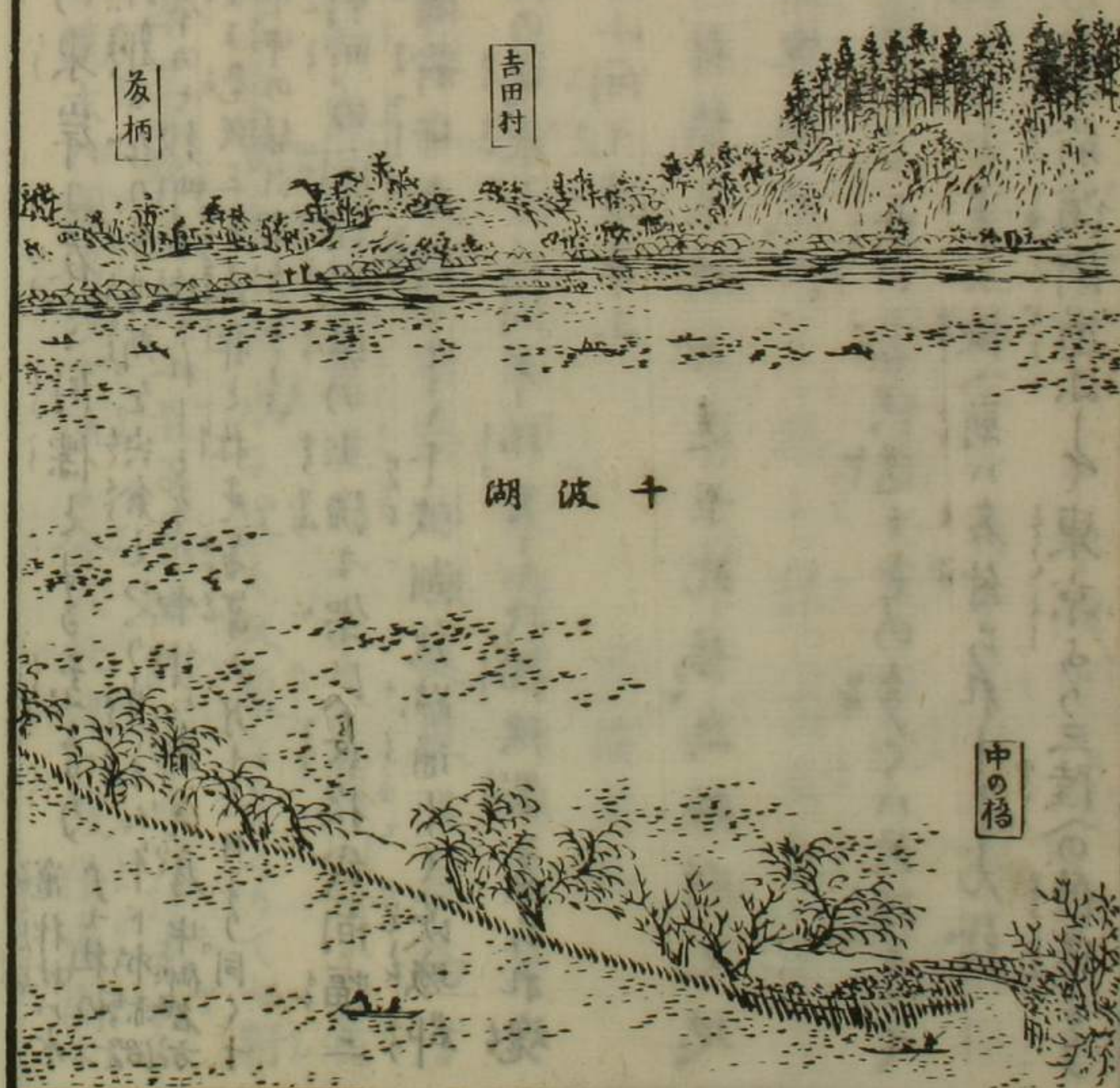
吉田の杜

吉田村

坂柄

湖波千

中の橋



柳堤

小林至刻

系うゝ柳堤の

有るまじハ

風北ゆゑも

いそつたり

る

柳堤

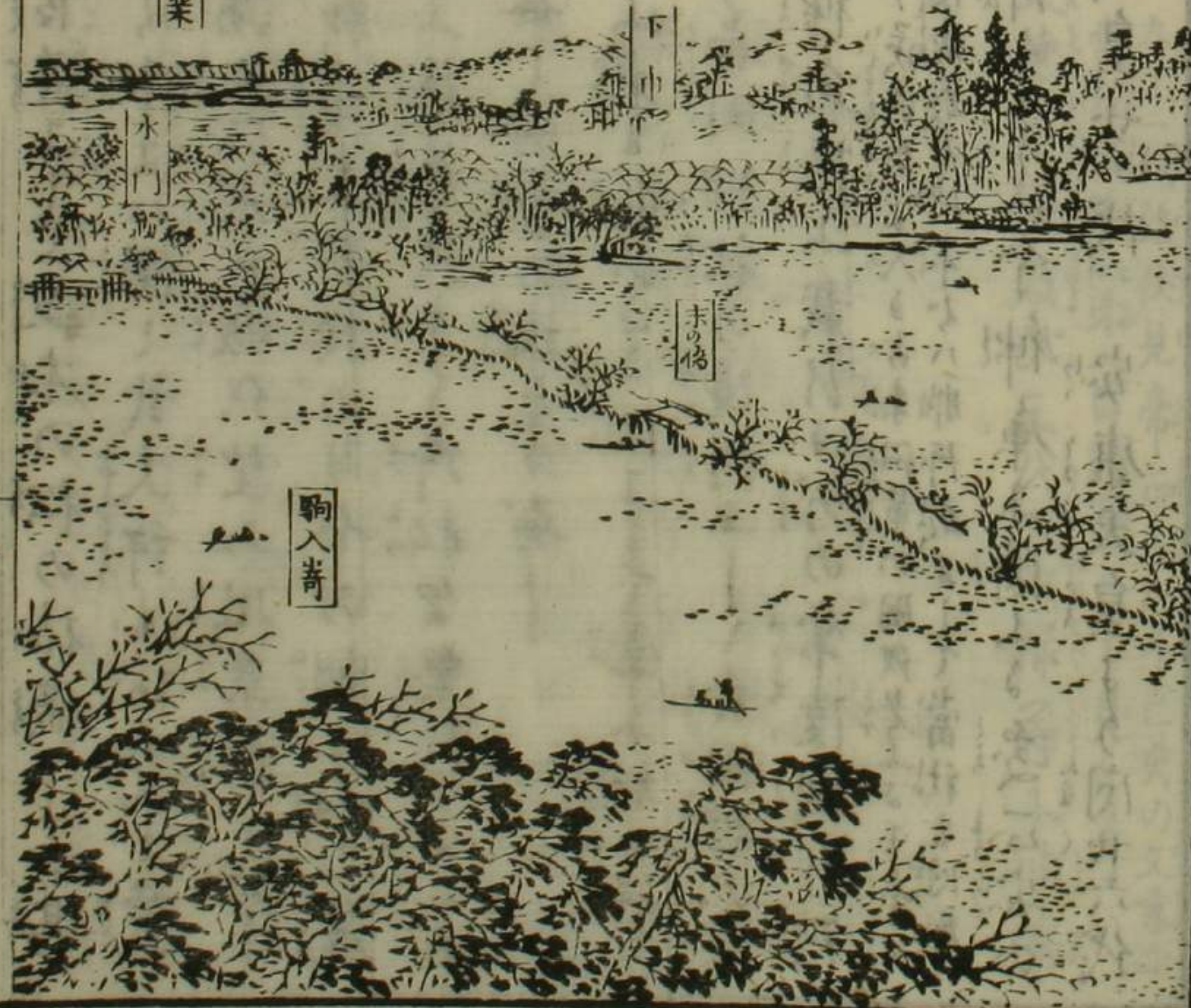
三嶋寺

下巾

末の橋

駒入寺

磯原



三十五

此所ハ古くより奥羽の官道ふして並本の松の枯槁する其
根の近來より残りし中ハ圍み式大許も何れんと覺
し死何りし西北ハ子波湖及び水戸城代望み風景も好
里遠小日本武尊東夷伐鎮久凱旋の日今の朝日山の麓
ふ着松何りし時何りし孫葛城より神松を繋死とめられ
るより此松起れりと蓋し附會の説なるを

吉田の杜 一ふ朝日山といふ東に向ひたる岡より常小旭日伐り
くるゆへに爾稱ふとなり吉田神社の境内より吉田村の地
小属是當社の延喜式神名帳ふ載りし所の常陸國那珂
郡吉田神社と云なり
今茨城郡に入る古来那珂の國伐考ふるは今の
後城郡の地半ハ那珂郡にして當社も同郡
中ふりし創立の年月詳ならず今神庫ふ傳ふる安云安の
事明し
文書ふ按て考ふるふ八皇廿一代 安康天皇より同廿六代

武烈天皇兩朝の間より何り
九十二代後伏見帝西敏元年己亥の文書ふ
當社勸修寺八百餘年と見えたり
祭神日本武尊ふして文德實錄及び三代實錄等小神階
を進免らるる事仕見えたり又

神樂記曰武尊奉 勅東征焉駿河之夷賊欺武
尊之時因草薙之宝劍之威德遁其難盡平伏而
經歷相摸上總下總常陸過於鹿島神宮入御于
當宮揚錦幢於朝日山三角山奉崇吉田大明神
以來灵驗殊新々

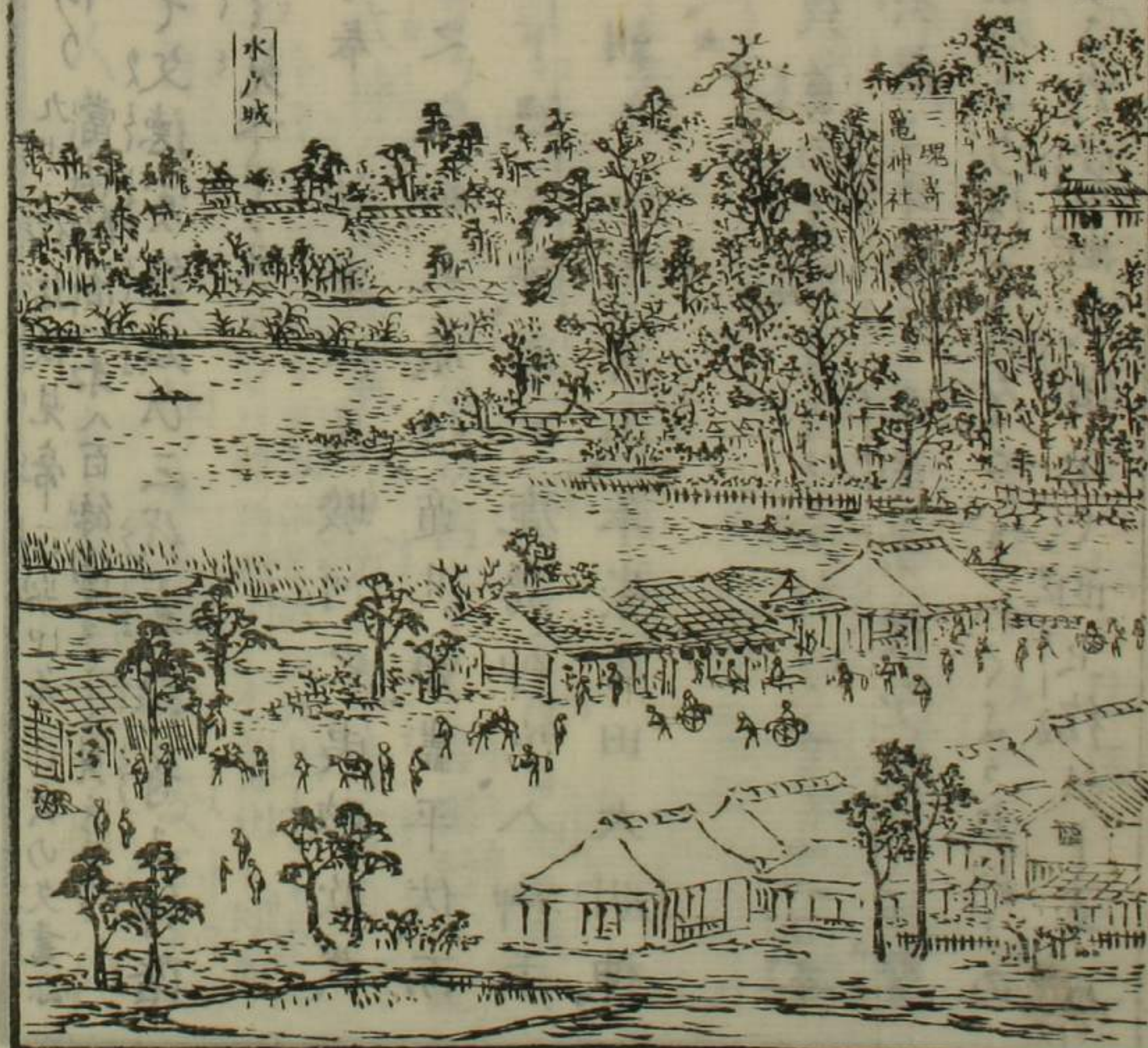
右の文は按る當社武尊の遺跡なりと云はるるふや日本
紀 景行の巻小蝦夷既平死る西南常陸を征る甲斐
國酒折宮ふ到りふいよりはるをくといふやね川の
味何りし事見えたりされ當國伐過きて西上給ひし事ハ

藤柄並木

三煙崎
煙波無限興
月白風清村
昔有三仙客
騷思各斷魂
小林元茂

常光寺

水戸城



戸村義暢

それうの

それうの

松の

やうの

やうの

戸牧久

藤うの松

ううて

沖崎

おのの松

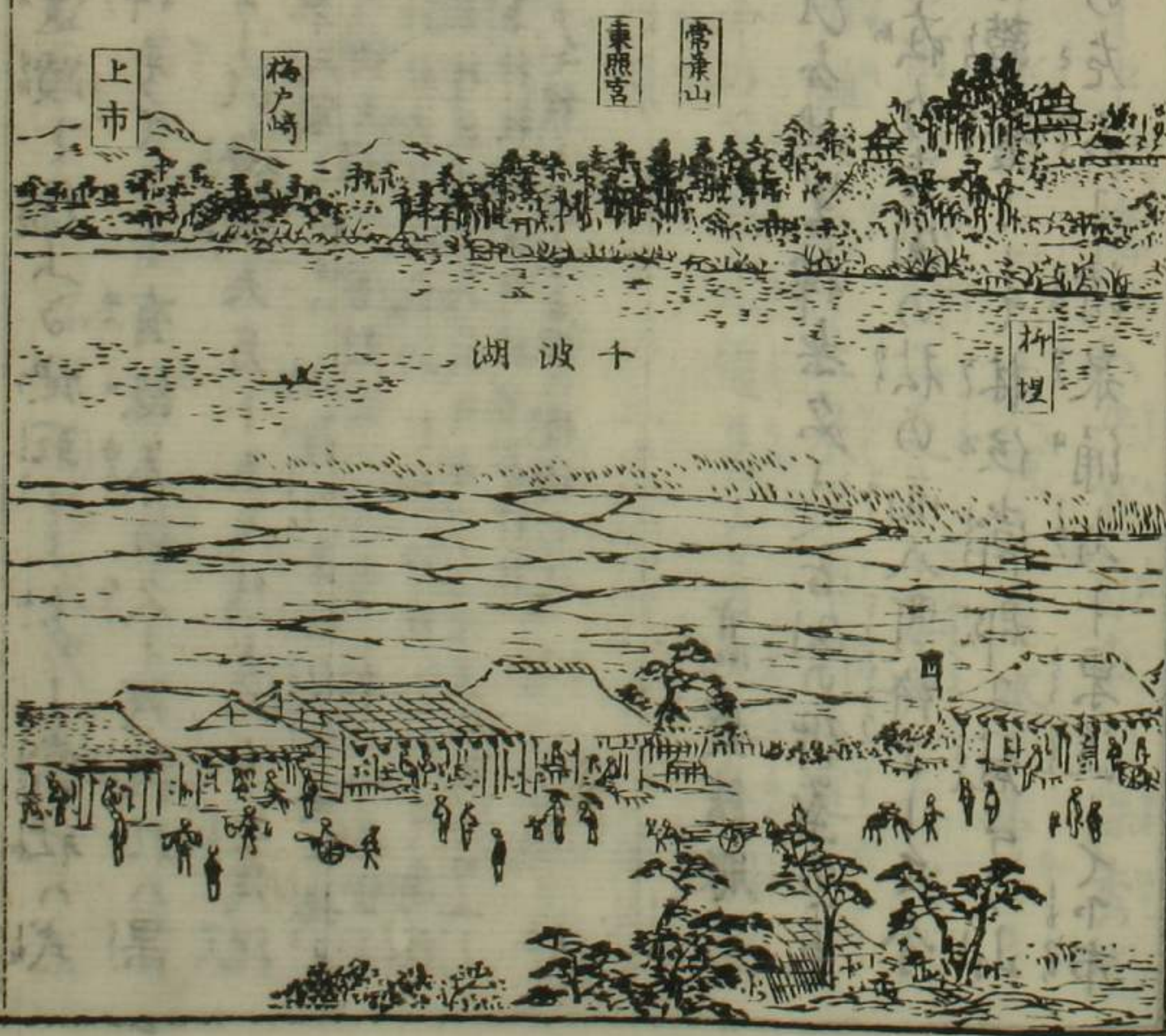
小林至剛

根芥つむ松

それうの

松を

おのの松



常光山

東照宮

梅戸崎

上市

十波湖

柳堤

疑なり。總て關東尊の遺蹟と稱ふ地取れ小多。當社ハ式
内の大社より創立以降降せて千有餘年の久し。成程ハ果
して其遠路なるや知るへう。毎歲九月十五日代々く之代紀
の親禰より後陽成帝の朝天正陽親王の皇子親仁親王
常陸の三社といふハ鹿島神社大洗磯前神社静神社とありて高社
ハ其へて一統ハ吉田神社笠原神社松戸神社代々く水戸と社とり
なり又笠原神社松戸神社松戸神社松戸神社松戸神社松戸神社
新飯神社水戸神社松戸神社松戸神社松戸神社松戸神社松戸神社
栗里九景

吉田神樂

高盛法眼

又やふもかり。悉ひハ此里神樂名ハ吉田の御祭の
笠原山 笠原新田ハ在リ吉田の社の西八町絆より今
一等官林となる松杉鬱蒼として林位當郡は冠う山
頭水神を伺ふ石階の左右ハ清泉涌出。東流して下市

の用水となる寛文年中下總の人平賀勘永門保秀関
流の算術ハ長じ藝く水理ハ精し。代々く水戸小召く
祿を賜ふ時は濱田の市坊飲料小乏。く毎戸これ代患
ふ依て保秀は命じ暗樋代爲り此泉代市街小通。初め
く用水の便代はう。今の笠原水道是なり文化年間水
戸哀公浴德泉と名付景山公その三大字代書。藤田一
正又とて記代作り石小鍋。笠原の水源小建らる碑今
現存。在柳此地ハ水戸の市街代距。く武後餘町よりく
幽邃の地。う社前石階の下ハ逆川の流れる常ハ松楓
枝茂交へ。濃陰喬く石上苔滑。くふく人跡稀なり。花代
存ハ紅葉を愛る輩ハ多く此地をく。第一ハ就中夏日
炎暑の候ハ衆人此に來りて涼代納れ水茂掬ふ常ハ

消魂橋



驛人の河藻伐のうまきなり

笠原水源社前石階の右の方ふり崖の中段より湧いて見

を設けし水伐り唐銅を造りて龍の口より吐出して直ちふ

暗樋に入り千波湖の南岸伐東より濱田の市坊に通ぜり

浴徳泉の碑 同所逆川の西岸ふり自然石よりて縦三尺八

寸一分横四尺六寸石質堅牢ふりて黒色なり加藤堅安の

人の發起よりて文政九年の建置なり藤岡幽谷子の撰文なり

る字幽野弘の書なり 刺谷子俗稱次郎を東門といふ 浴徳

泉の題字ハ景山公の親筆ふりて幽谷子は賜ふ所なり

浴徳泉記

浴徳泉者其源出于水戸城南吉田郷笠原不動坂下有銅龍受其瀑水々自龍口吐坂之左右有泉四

朝日山
吉田神社

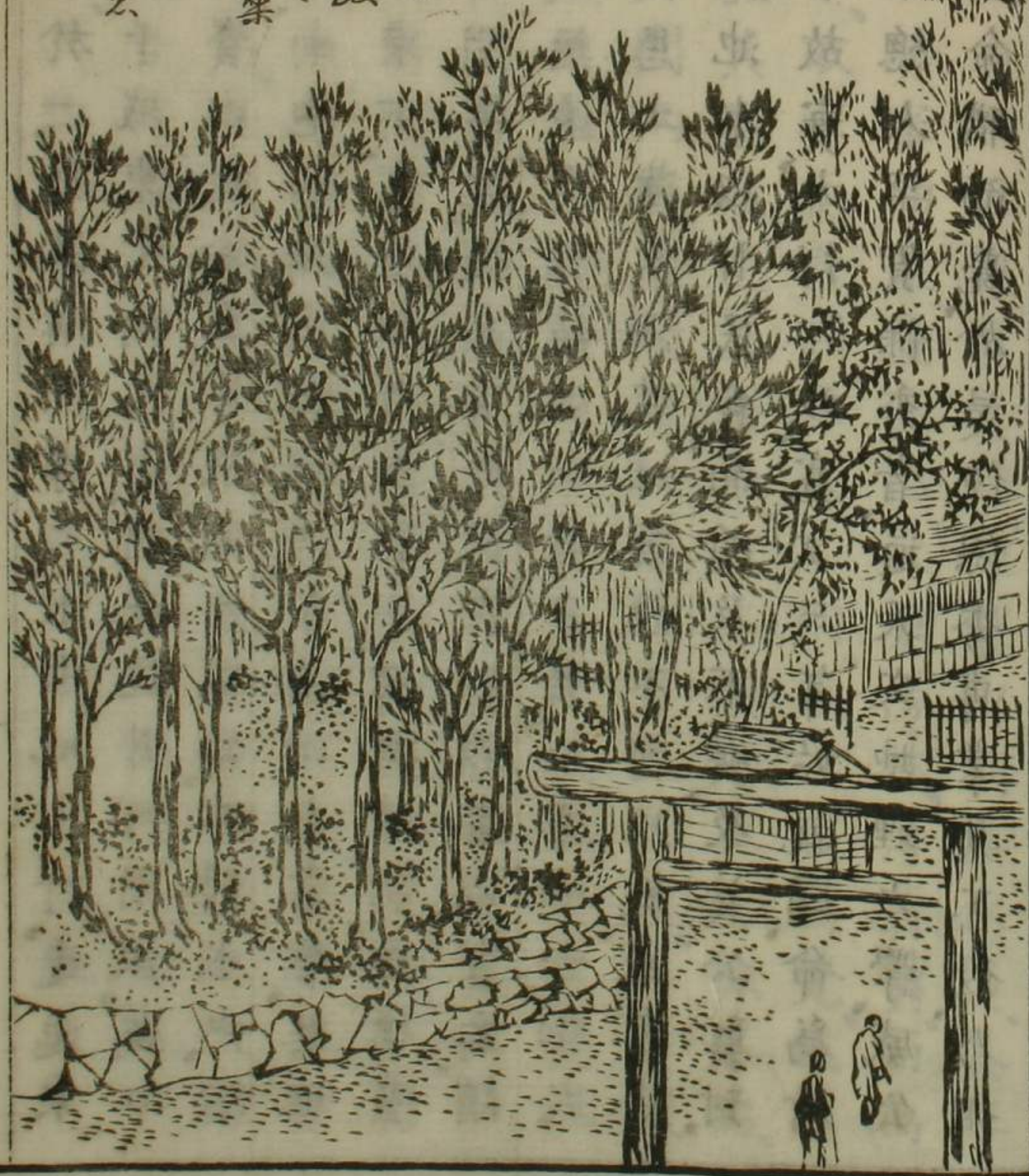


小林元茂
肅穆神祠古
威靈千歲垂
跋興無眇視
禱客競奔馳

高盛法眼

都

名之園の
柳景光



穴匯而會於一、爲匿溝而導之、水由地中行、逶迤東北、暗流徧于城東十街之市、所在爲井、可用汲、萬口之民、朝夕資以飲食、爲昔我先君威公始封、水戶之爲地、南抱仙湖、北踞珂江、左濱田、右常磐、其地勢西高而東下、寬永中大修郭郭、增廣規制、廼填濱田之田、以開廛里、彼商賈之民、在城西者、以實爲謂之田町、民無遠近、願藏其市者、日衆、紅塵四合、烟火比屋、而獨患土薄水濁、其味苦惡、不可以飲、或嘗謀引吉田之池水、以甘民食、而所及不廣、及義公襲封、考遺訓、咨故實、大行仁政、寬文三年始就國、命爲新井、時有下總人平賀保秀者、通天文地理之學、威公聘之、未及命職而薨、於是使保秀專掌其工役、乃相

笠原之地、有冽寒泉、甘如醴、疏鑿以利其水道、其導之善、因地勢審曲直、量高低、大要傍林、薄蒨鬱、而爲陰溝、其下故水氣常潤、旱歲不涸、或以石爲甃、或以木爲械、謹其蓋藏、通其壅塞、故不使濁流污穢入焉、至紺屋七間、兩街之間、跨仙波湖下流之處、則特設銅匱以架之、如棟之隆、長六丈有六尺、蓋泉水發源笠原、東過米澤、折而北、又轉而東、至藤柄、東北至紺屋街、踰七軒街、又東北流、自第一街、歷第十街、至新町而止、其水道凡三千七百九十有五步、而廝流旁出、則不與焉、用夫二萬六千人、費金僅五百五十餘兩、而工役告成、蓋所謂因民之所利而利之、惠而不費者也歟、其後公屢至笠原、觀其泉、々左爲漱石所、

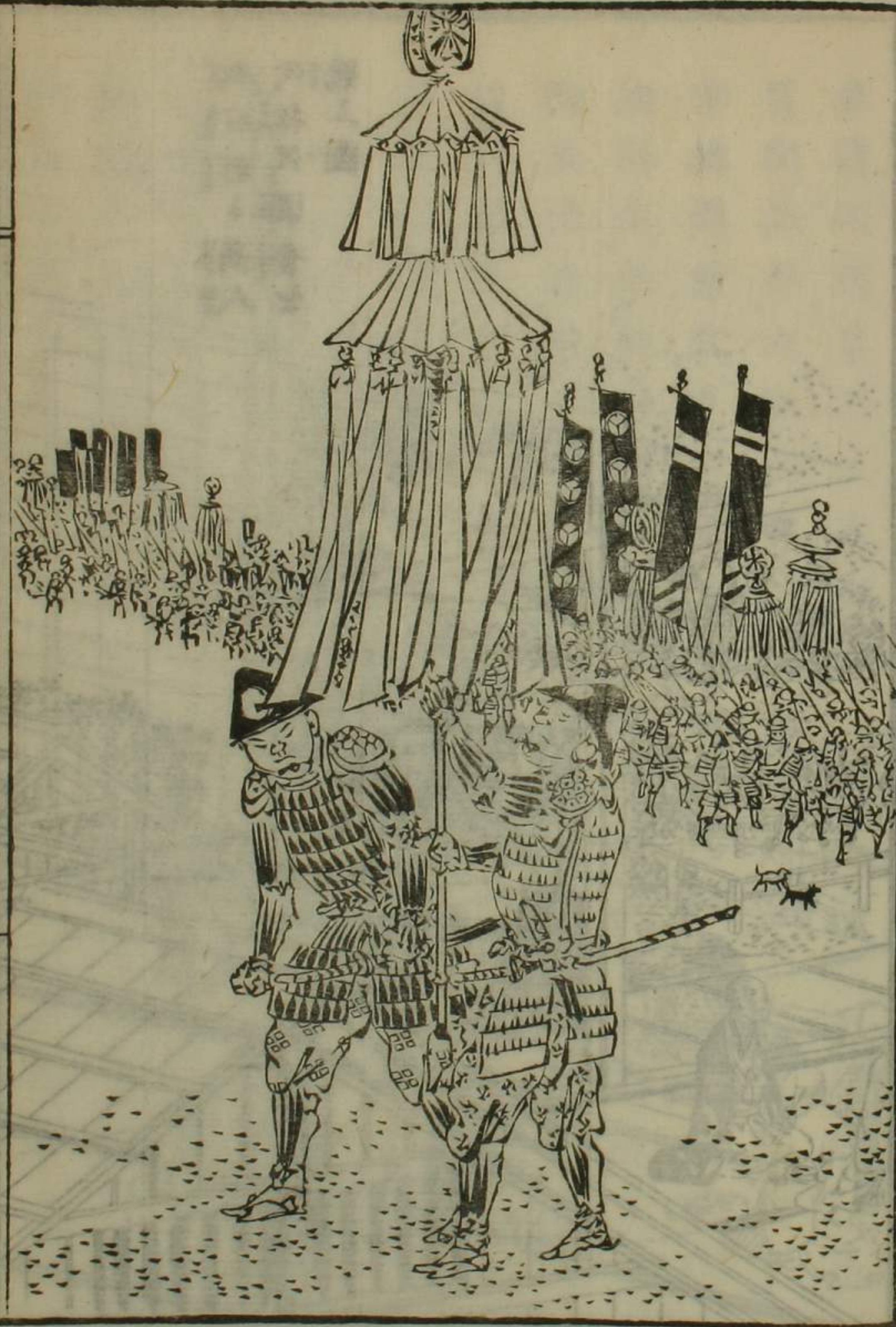
千波原操練

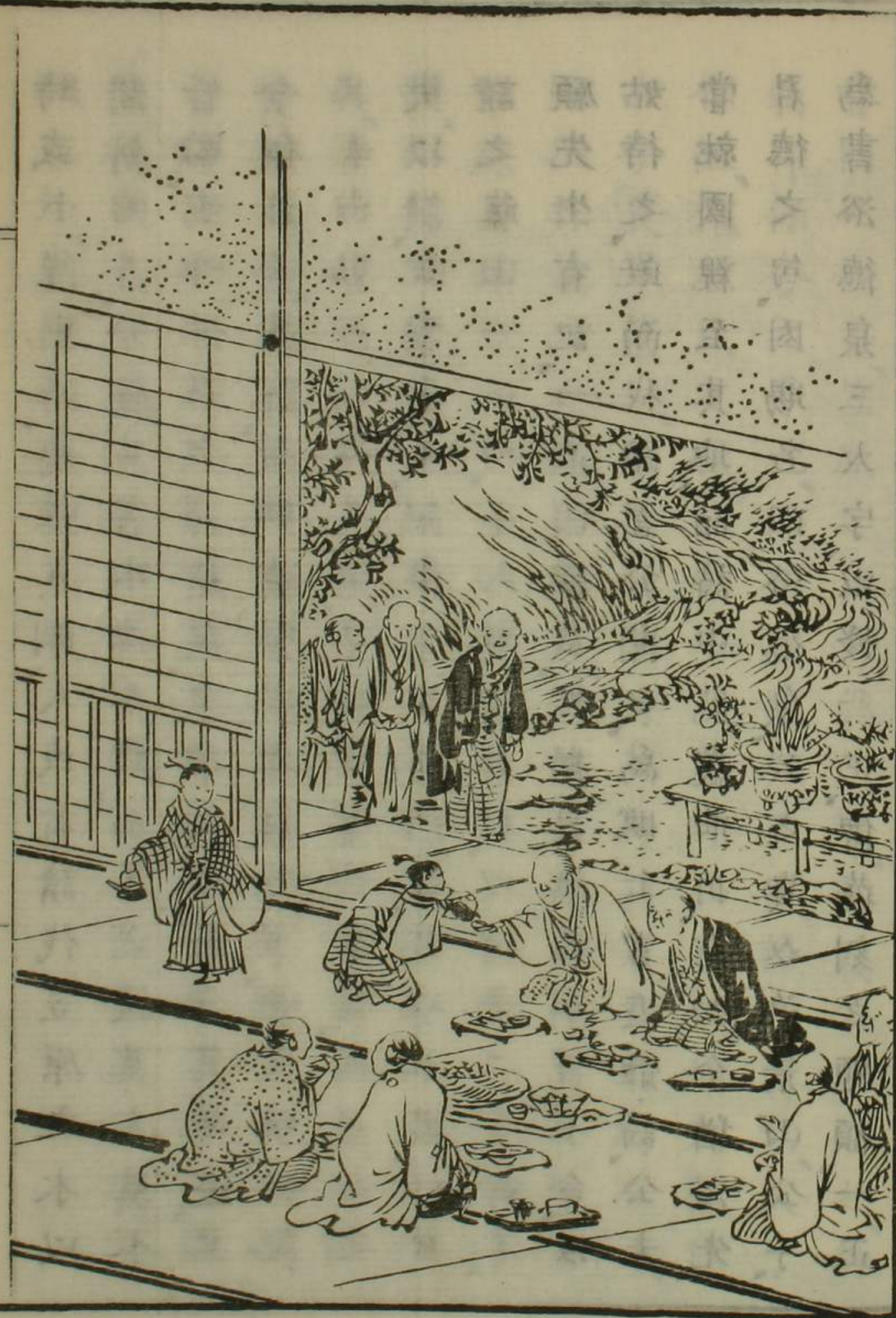


題春蒐圖

田獵遠追源將遊
刺猪誰是四郎儔
一從盛事喧天下
無復人稱不二蒐







漱石軒
商人
招酒食
賜圖

時或小隊出游、觴咏其側、人或有請伐笠原之木以開新田者、公慮其害水源不許、百年之後其言莫不皆驗、嗚呼仁君之澤遠矣、東市父老謹守其故迹、至今猶能道其詳、而加藤堅安者最好事、愛文雅、欲記其來由、勒石以傳久遠、享和中嘗與衆謀、因司市之吏以請、既蒙俞允、記事文不獲所托、是以不果、一日請之藤田一正曰、小人磨襲貞石以待者二十餘年、願先生有記、一正曰諾哉、然斯泉無名、不可不命、汝姑待之、既而我納言公聞之、爲賦七言近體詩、公未嘗就國親至其地、而詩中能盡曲折、有如今猶浴先君德之句、因賜名曰浴德泉、公之貴以弟景山公子、爲書浴德泉三大字、以授一正、俾獲刻之題額、一正

嘗聞之故老、笠原之泉、舟翁所導、而義公實使之、舟翁即保秀之号也、保秀以羈旅之臣、議用有功、父子相繼、擢牧民之職、能盡地力、食錄五百石、邦人稱爲古今良宰第一、則斯泉也、呼爲舟翁泉、亦不爲不可、雖然非義公之能用其棧、則使舟翁有神禹之智、安能底其績哉、今公之賜名、特歸美于先君之德、爲得體、而其文采風流、使斯泉生光輝、蓋亦義公之餘烈矣、今公之明、上下受福、固莫有并深不食之患、但恨襲封之後、未有就國之命、他日就國、大修威義之政、膏澤之降、浹洽於民心、則其勒石垂不朽者、寧獨浴德之泉、乎哉、一正雖老矣、職在文史、執筆以埃、文政九年、歲在丙戌、夏五月



志けりあふ
 望る原山の
 下あふ
 かいぬ
 時ぬの
 けんり
 まさうれり
 戸牧久



浴徳泉

浴徳泉

逆川東茨城郡東野新田の池水より發し登原新田より
同處官林の東茂屈曲し北に流れ子波村の地先田
畝の間伐徑て子波湖に落るなり水淺くして舟行なり
漱石所の跡 浴徳泉碑石の遺伐より天和年間の頃と云ふ此
處に茶亭の遺跡あり漱石所と名付遊息の地なり水戸義公
在國の折より志す此所を逍遙せし曲水の晏を催され
又府下の豪商を免し集めて酒肴代賜りし事なり
と云其頃此亭の禁條を示す

漱石所規約

- 一禁不動堂上食肉乱行
- 一禁漁釣前池

一禁携美味昔酒耽逸樂及夜陰

一禁坐論先後競爭便地而至喧囂

一禁此泉之流盥漱投葷肉唯浮觴浸瓜果不在

此限 天和三年癸亥之夏

又常山集 復日旂玖離珂羅山銀河寺林中即興得池字

懷嘗遊此地一夢十周暮不動威嚴矣輕雷聲殷其

雨晴炎暑退風快積雲披漱石堅人齒臨流洗我詩

飛泉清遠座傾海醉揚庖瀉下銀河水漚涼無熱地

儼塾集

翠崖奇絕處泉落響琅然一漱靈根清令人得地僊

神埼八景小序 安積澹泊

燕唱牧笛閑南岸倚門而望則風霜搖落之紅楓曝

錦是笠原之勝景也
栗里九景

笠原秋鹿

清水谷大納言實業郷

そみち葉のふとぬるなり笠原ふつれうねてむ牡荒あくらむ
千波原東茨城郡千波村は属以東西凡指町南北六七町
伴の平原ふして三方をへく山林は連り西の方の濱街道
ふ接以此地の水戸城は距る事式指録町ふして千波湖
の南岸より少景山源公世を継ぐひより 王室代
尊と藩屏の任代重んじ天下非常の用ふ供せんる為専ら
武技を擴張し當時郭内は弘道館は設け各々の師代
探ひ園中の士民をして教導奨励しあひしるに列藩その風
は倣ふて来ておしえ代受る者多し公豫久此地を相し人

馬操練は便なり代りて遂は進む將の挙なり其作法皆
古えふ微一行装甚義代尽さるるに形し今ふ於て公の政
蹟代何る一の義談と云なれり

曲水の宴 天保十三寅の彌生半ハ景山公偕樂園は逍遙
せらま一頃府下の文才何る輩代何るし召集へ園の西な
る狭渡川に臨み彼蘭亭の故例しふ微ひ觴を浮へく
終日待歌の興を添られしとなり是は往し寛文の初め西
山公の緑り園は高枕亭代設けさせ給ひし時此所ふ於て
曲水の宴代催ふさききり昔しを懐ひ出られ斯ハそのせ
られりしや

養老會 同年九月下旬公好文亭に坐して領中の貴賤
甲乙代問ひに齡高は男女代召寄待し歌ふ或以ハ書画

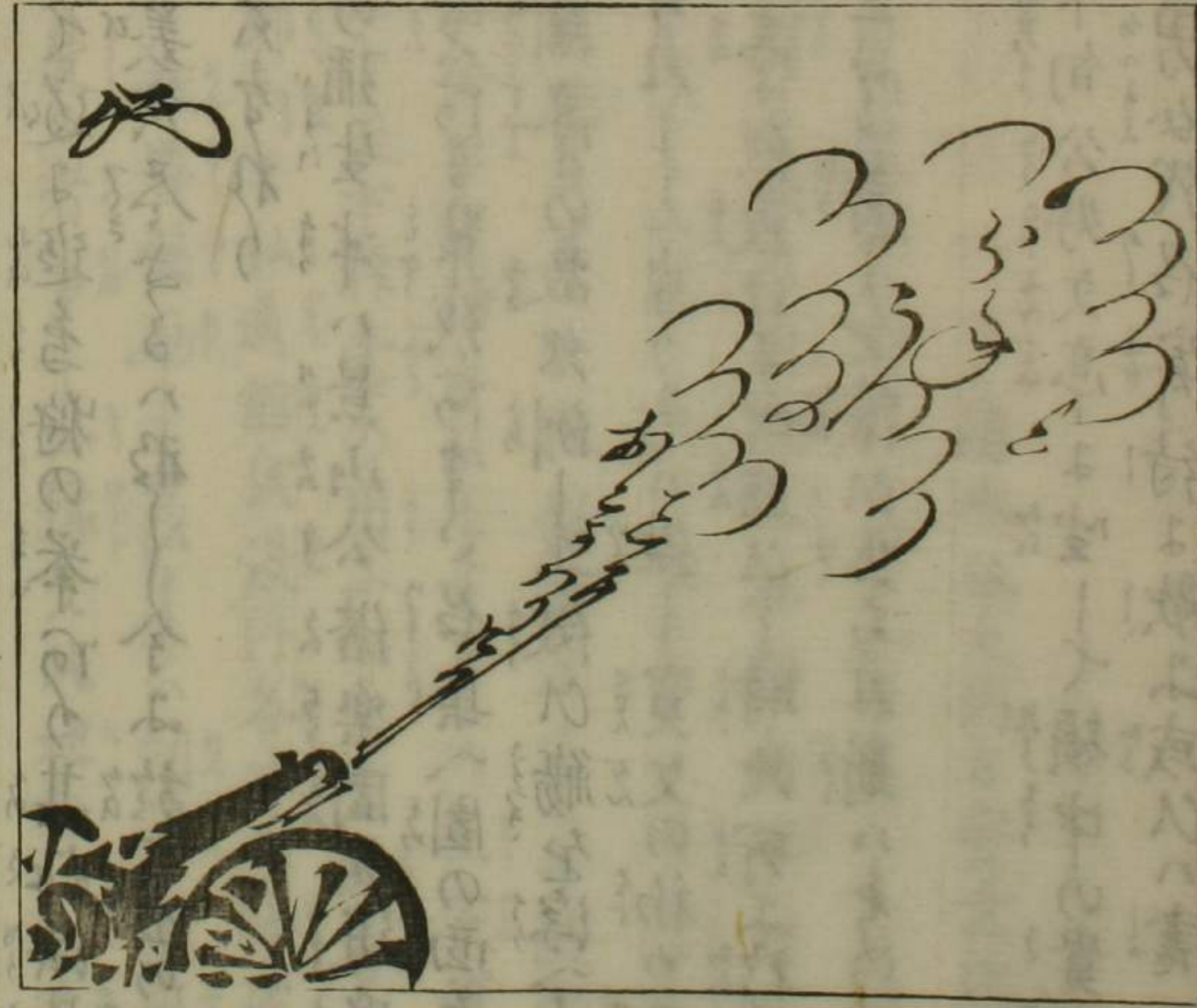
下は出せる画賛ハ景山公
の親筆ふして藩士某は賜ハ
りしものとて今其家ハ傳ふ
是迄多狩りし時の口
すみなり又同一頃
の鉢ふ鐫付られりる歌

今日をまじく様

かきせる武士の

歌ふとて香残し

残さくともや



の類ハ其所好隨意書つて
賜りしは古例ハ代引する
とて其後公の夢
遊給ひより富宮大夫人の父久二年の冬丹以此亭中
七旬ふ餘れる老翁老媼幾人々欠し何つる物とてせり
ける其時の事實ハ吉田令世ハ養老の記青山延光序ふ
詳し見へり

養老集叙

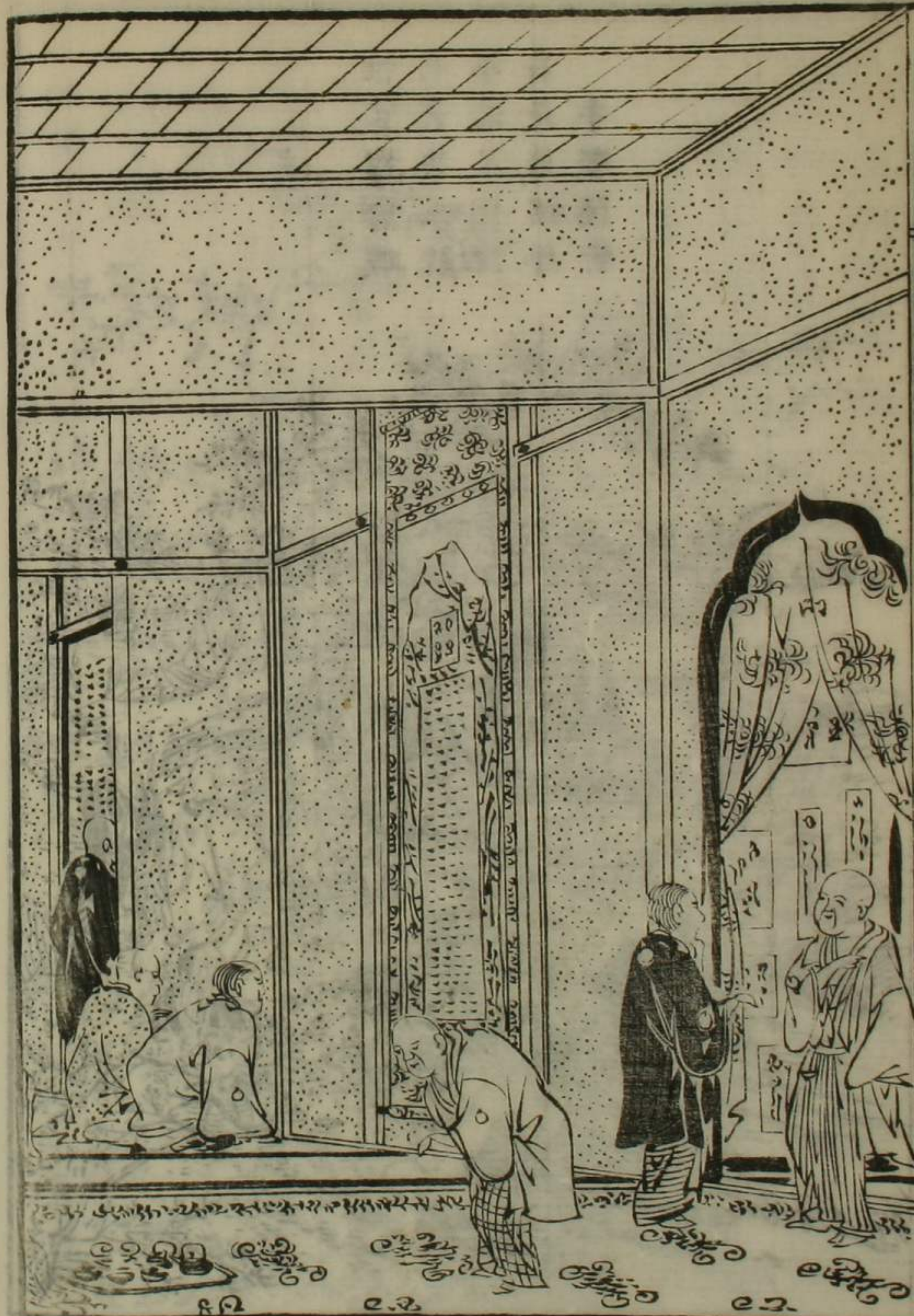
青山延光

天保壬寅秋九月廿五日、我納言公命會國中老
人於偕樂園、士則八十以上、庶人則九十以上、無
男女皆來集矣、公爲之設宴、親起行酒、賜之以衣、
命其有文藝者、各奏其技、一座感泣而退、公命近
臣、輯其詩歌書畫爲一卷、命臣延光叙之、臣聞昔

雅宴都俞暇
明良共玉觥
潺湲足相悅
自是角招聲
手塚陽軒



會老養



者關東之俗不知尚齒先君義公實初壽中山楓
軒人見卜幽繇此國俗知尚齒今公能繼其遺志
於百餘年之後酌金壘以眉壽尚齒之教固將被
於士林即田夫野老拜賜而歸鄰里聚觀駢肩接
迹嘖々嗟歎必指其人曰此吾君所重也廼相率
敬之自今而後須白之老庶幾乎不負戴於道路
矣是爲叙

艱老の紀

あはれみとあはれをうけし聲長閑ありを春の河
うねり代はあはれぬとてをふかき身をせむ
くむはれいりてあはれきしもの年ふけてまゝ
魚と思ひきや命ありきや佐那の井山とては



書畫館

とらふてせはめはるはるにをほさうとおひ
終りぬ御ふふはあへくさるねほせよめさる

吉田令女ふふふふふふふふ

天保十三年壬寅九月廿五日の養老會は八十歳より百

歳迄八十五人又久二年壬戌十月十八日の會は八十歳より

九十五歳まで八十六人なりし又明治十二年の秋舊

藩士西宮宣明子古例は例にて亡友が死後人々上市

重楊亭より酒樓に招き集めて尚齒の會代開かれし

其折の紀より皇國より膏延代催されし古来より

例に代幾行の書載せてはるふふのされしを贈られ

しと固ふふふふ載す

重楊亭新室尚齒會紀

高死齡はをふふふふふふ 清和の帝の御代貞

觀十あふふ八年の春弥生ふ南淵の大納言の初めて

のりれより安和二年のふふ弥生中の須栗田のたふ

のあふふ大納言ふふふふふふ時更ふふふの依ふな

らふふ七人の老翁を集めてふふふ此の老ふふふ死

ふふふ會をふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふ死をふふふふふふふふふふふふふふふふ

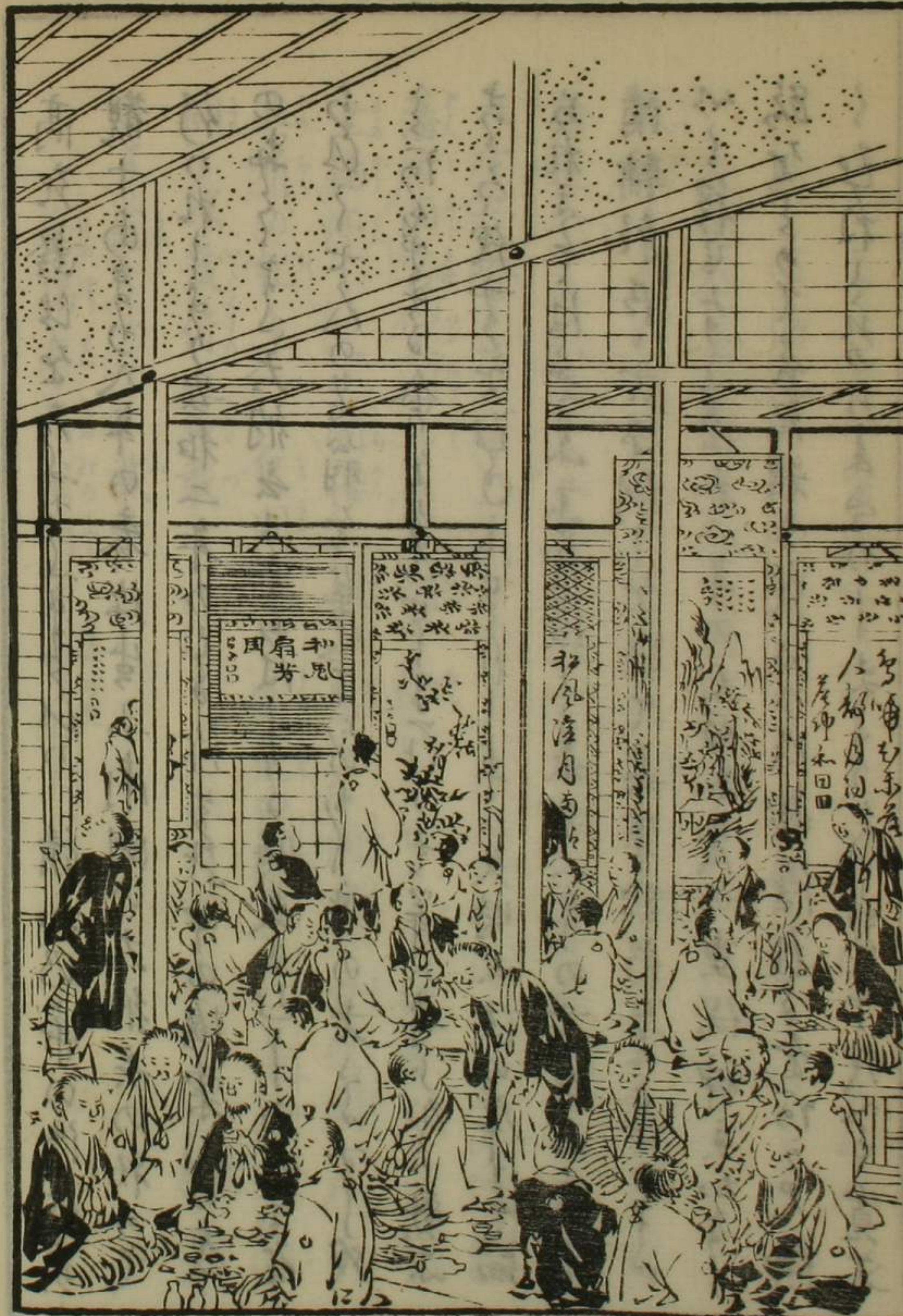
られふてはふふふ年死後ふふ安二年のふふふ藤原

清輔が古ふ例に追て其事死後ふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

樂壽會



七とての春我西山の君吾婦の風習老を尚ふ事代知
 られとて古例のまゝふ屢賀進ひられとて近う景山
 の君先公此御政を慕ひとて養老會をとおこすの
 れうとて是より明治十餘り二とての五月廿七日垂楊亭
 のあるに新室代はくりてそのとてはくはるふとて上
 翁よりて漢大和の歌をくくし書畫の日は代急する人
 代集へてさふ宴の途を開ふとてハ七人の尚齒は似つ
 うへに代もさふとてこれ其周より景山の君は河を
 されし例よりては文會をふとて額をかけしは
 くれ後をみゆひ人のほくは遊りんふとてなるはつとておむ
 りふとてはくけそおのれ思ひはるも今日此老人の故は列
 らすわしとて後の思出草とてそをわち燈のりて

少く短夜のみうふ筆をとりてお月つるを死老に眼
 おく拭はつたふとて志ふとて出するハ西室宣明と
 心ふ公相となんありける

樂壽會 卷首は説く如く去る明治六年の冬 官廷
 の允許を得く偕樂園代公園と定めらるしおり辱く
 を内務省より若干の金を下し給はり園中修補の料
 小充らる是景山源公の昔年園家は勲勞ありし事
 代思ひ出されその遺蹟を永世不朽ふ傳へむはんとの
 慮慮ふ出るものふして園中の士民昔より舊主の恩は浴
 し今又 朝恩の渥死代作死誰か感泣せざらんや同く
 十六年縣廳の職員又能協力して各俸給の幾分を出
 して年々の費用代資く則ち是代樂壽會と名づけ

春秋兩度十月好文亭は集合して宴を代閑く代例今茲三月更ふ其規約を代定め縣下の人民甲乙を代問はれ新な會員を加入する代許を而して各自出で交の會費殊に小僅を少なりと雖も朝恩の渥を公の德輝の著明なり代親を衆人に示されんとの計畫より出るなりへし抑此會場は臨みてハ素より高卑貴賤の別なく皆その園座を列りておのろく或は詩哥俳諧又ハ畫画茶の湯の類は代弄ひ専ら風流のを旨とせられより席上のり川とも蕭然より彼酒狂放逸の舉動なくおのろく閑雅清興を代極むこれ公の芳蹟を今日ふは之此會代催されハ公の昔日の樂と不遠られハし

書畫會 明治十年の春の頃舊藩士西宮宣明名越一庵松

平雪山相川益齊小河逸齊の諸子昔時景山公好文亭小藩士の齡七旬は餘れる人々代召集め各其嗜め道を不隨ひて詩歌畫画の類は代書し欠りハ公の親ら筆代採り其上は題し終日風雅の興を代添へられ昔代欽慕し官廳の允許を得て同好の士を代招請し同年に月に初めて偕樂園に此雅會を開き代より遠近聞傳へ結りつて來觀するもの多く毎歲春秋式季に月か々々是代催ふ事をハなり

井上本店
本郷區森川町
帝大正門前
電話小石川四三五四

明治十八年十一月七日印刷
全年十二月二日出版



編集人

松平俊雄

水戸市大字上市
奈良屋町廿五番地

印刷人

北澤清三郎

全市大字上市
大正町十七番地

水戸市役所蔵版



